主は、生きておられる

Unser HERR lebt



vol. 10

graph magazine

2005

まことに、まことに、あなたに告げます。

人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3･3）

Unser HERR lebt

主は、生きておられる vol. 10 | 定価100円（本体95円）

INDEX

巻頭メッセージ　04　ともに生きることの大切さ／ゴットホルト・ベック

3人のメッセージ　14　真理を求めて／藤畑卓郎

22　目的を持って歩む人生／清水洋一

30　人が生きる意味／浅野寛治

8人の証し　36　家族の救いと限りない希望／芳竹勝也

41　心の貧しい者は幸いです／神田啓子

44　主の御栄えはとこしえに／上野エリ子

47　主のあわれみは尽きない／杉本文雄

50　主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう（ルカ1・45）／杉本淳子

53　主の愛と赦しの中に生かされて／山口一郎

56　私の思いをはるかに超えた主の愛／山口寿子

59　主に明け渡してから／福留伸子

ベック夫妻結婚50年　62　50年の主の恵みを感謝して／ゴットホルト・ベック

66　パパ、ママ、おめでとう！／ハイデローゼ・ガイヤ

68　私たちは主に祝福されている！／酒井千尋

連載メッセージ　72　『モーセの十戒』第10回 神の聖なる戒め／ゴットホルト・ベック

よろこびの集い　82　よろこびの集い2005―御代田、ドイツよろこびの集いの記録

メッセンジャー予定表　88　メッセージ当番表　2005年12月/2006年1月～3月

各地の集会から　92　こちら春日部集会で～す

94　インフォメーション・ボックス

96　結婚・葬儀の報告

98　演奏を重ねて10年「メサイア」全曲コンサート

ケーキ　99　ココナッツ ケーキ

102　キリスト集会へのご案内

104　本の紹介

106　全国の集会住所録



Unser HERR lebt

主は生きておられる

vol. 10

さて、主の囚人である私はあなたがたに勧めます。召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。（エペソ4・1～3）

何年か前、ある所ですばらしい集会を経験したことがあります。そこに集まった一人一人の方々が、自分の悩みや苦しみ、信仰の問題などをすべて率直に、正直に話しあうことができたのです。その時、そこにいた全員が、本当に「一つである」と感じ、「一つにされる交わり」を経験しました。私はこれこそがイエス様を信じる者たちのあるべき姿だ、と思いました。

一人一人の悩みは、私たち集会全体の悩みです。一つの器官である一人の信者が苦しめば、他の器官である他の信者たちも共に苦しむ（1コリント12・26）、と聖書は言っています。もし、そうでなければ、根本的な誤りがどこかにあります。ある信者が自分ひとりだけで苦しんでいるなら、その人の霊的な成長が妨げられるだけではなく、集会の人々みんなに影響が及びます。自分の悩みはみんなの悩みであり、自分の喜びはみんなの喜びでなければなりません。あなたは誰にも言わずに、自分一人で苦しんでいることがありますか。自分一人で主に祈るだけでなく、兄弟姉妹にも祈ってもらえば、どれほど心強いかご存知でしょうか。

教会により、またキリスト・イエスにより、栄光が、世々にわたって、とこしえまでありますように。アーメン。　（エペソ 3・21）

私たちは、「教会により」、つまりこの私たちの集会、群れによって「主に栄光が帰されるように」と願っているでしょうか。私たちは集会に、どのような目的をもって集まっているでしょうか。単に、誰かと何かを話したいから、友だちが欲しいからという理由で集まって来てはいないでしょうか。それとも主イエス様のみ栄えを望み、共に主の栄光にあずかることを願って集会に来ているのでしょうか。

私の場合、主は、私の信仰を一歩、一歩と導き、引き上げてくださいました。振り返ってみると、それは三つの段階を通ってきました。

第一の段階は、私がまだ救われていない頃です。私は「救いの確信」がないまま、聖書を読み、祈っていました。「救いの確信」は持っていないのに、「私たちは罪人です」と告白しあっていました。一人で主の前に立って「私は罪人です」と自分の罪を認めることも、悔い改めることもしませんでした。あの人もこの人も罪人じゃないかと、大勢の人の中に自分の罪をごまかしていたのです。

しかし、その後、主が私の心の眼を開いてくださいました。心の眼が開かれると、自分の罪しか目にはいらなくなります。それで私は絶望し、自殺しようとさえしました。ところが、恵み深

巻頭メッセージ

ともに生きることの大切さ

ヨットホルト・ベック



い主は、私の罪を十字架にかかって赦してくださり、罪の問題はすでに解決されていることを、骨身にしみてわかるようにしてくださったのです。

その翌日、私は本当の意味で「救われた」ことを知り、喜びでいっぱいになりました。そして、この喜びをすぐ他の人に証ししました。これが第二の段階です。

私はそれまで、自分が罪人であるということはわかっていました。けれども、「罪を赦されている」ことがわかりませんでした。救われたとき、はじめて皆の前で「主イエスは救い主」だと、大きな喜びを言い表わすことができたのです。

主イエス様は、私にとって日を追うごとに偉大なお方になっていきました。そして、エペソ人への手紙1章3節から15節までのみことばを読んでいたとき、それがそのまま私に起こったことだと知りました。私はそのみことばの「私たち」というところを、「私」と置き換えて読みました。それは実に驚くべき幸いな体験でした。それからの8年間、私は救われた、罪は赦され、きよめられた、という喜びが私のすべてとなりました。

しかし、実は、「私たち」を「私」と読み換えるだけでは不十分だったのです。何十年か後に、エペソ人への手紙1章3節のみことばに、なぜ「私たち」と書いてあり、「私」と書いてないかがようやくわかるようになったのです。

> 神はキリストにおいて、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。（エペソ 1･3）

私たちが主イエス様のご臨在を現わし、証しするためには、主にある兄弟姉妹が一つになっていることがどんなに大切であるかをわからせていただいたのです。これが第三の段階でした。ですから、これから「信者が他の信者と一つになり、共に生きることの必要性と大切さ」について考えてみたいと思います。

まことの教会、つまり、救われた兄弟姉妹の群れは、霊的成長の場、証しの場、戦いの場、満たされる場であるべきです。

使徒の働き3章にある、足の不自由な男が癒されたときの話を思い出してください。足の不自由な男が癒され、主を知り、主のみもとに来て救われたとき、彼は自分でも知らないうちに自然に、教会、つまり救われた兄弟姉妹の群れの中に加えられていたのです。これはどういうことでしょうか。

「主のみもとに来た」ということは、「主と一つになった」ことを意味し、主イエス様を頭とするからだに加えられたことを意味します。頭とからだは、分けることができません。ですから、頭である主イエス様ご自身を知ることが何よりも大切になってきます。イエス様ご自身を心の深いところで知ることができなければ、前に進むことなどできません。

新約聖書を見ると、初代教会は、この世の政府からまったく離れ、組織や規則にしばられませんでした。御霊だけが、導き手でした。もし、御霊のご支配と導きがなければ、人の作った組織や規則が支配して、おかしくなったことでしょう。

まことの主のからだである教会の使命は、誰かが私たちの群れに入ってきたとき、私たちの内に、主イエス様がいきいきとご臨在なさっておられる、ということを感じさせる生きた群れになることで、決して、一つの教義に従う人々の集まりになるのが目的ではありません。主の恵みによって救われた者は、主イエス様を頭とするからだの各器官です。そして主イエス様は、この器官を通してご自身の栄光を現わそうとしておられます。いや、むしろ、主イエス様は私たち信者を通してしか、ご自身を現わすことがおできにならないのです。私たちは主の栄光を現わす使命を負わされているのです。

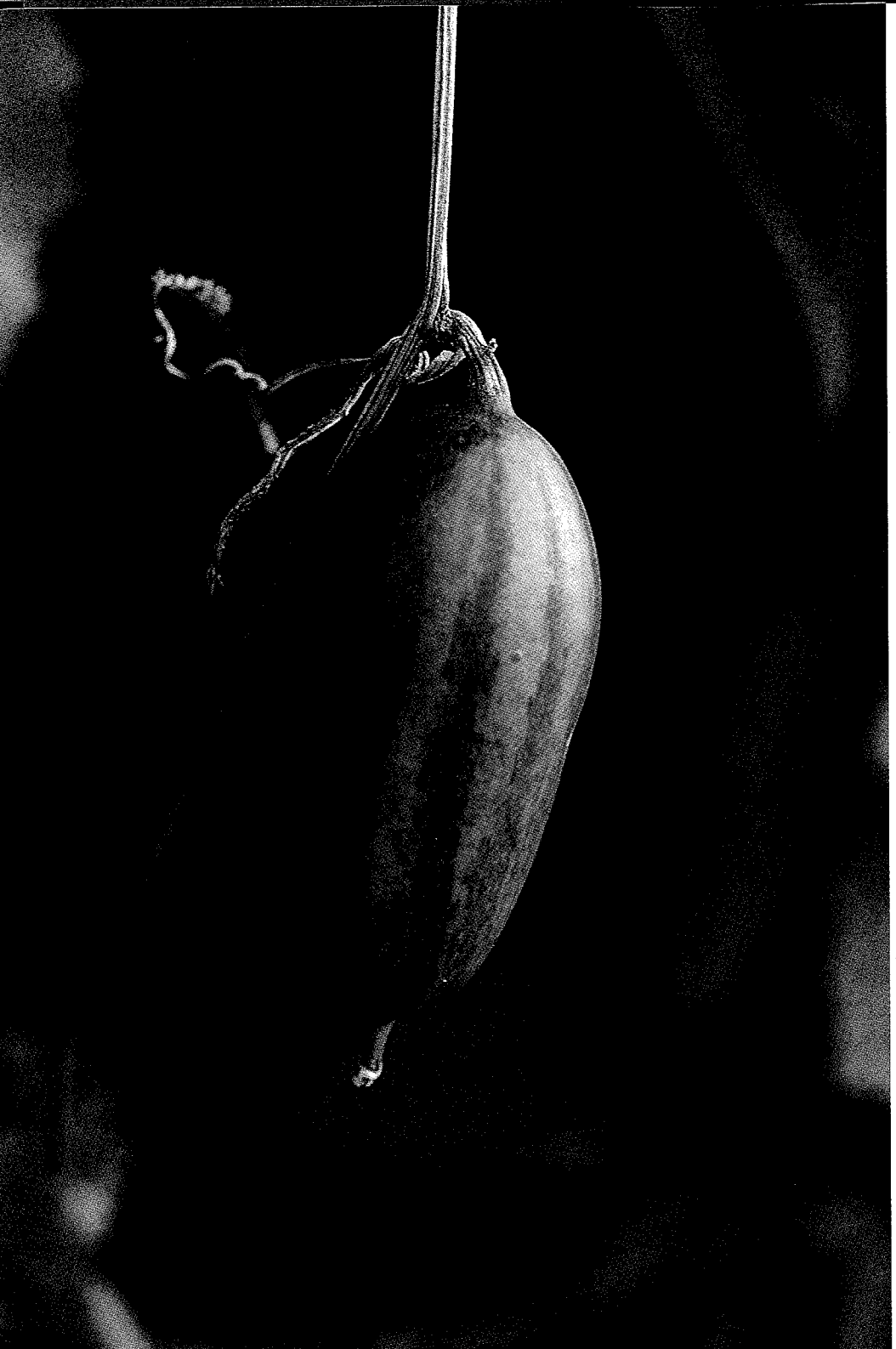
私たちが、主のささやかな御声を聞き、みこころに聞き従うことができますように。そのとき初めて、私たちの群れが、主のからだなる教会として霊的に成長し、証しし、祈り、すばらしい満たしの場となることができるのです。ですから、主にある兄弟姉妹と共に生きることは必要であり、大切です。

主の満たしは、自分独りで経験することはできません。ですから、兄弟姉妹が共に一つになって集う生活は、とても大切であり、非常に尊い価値があります。救われた者たちの交わりのすばらしさは、理屈ではなく、めいめいが経験すべきものであり、また経験できるものです。パウロは、それについてくわしくエペソ人への手紙の中に書いています。

ここでパウロの生涯を少し見てみましょう。パウロはなぜユダヤ教から離れたのでしょうか。パウロは聖書の教えを耳にし、読み、学び、それからユダヤ教と比べ、聖書の教えをより良い宗教として選んだのでしょうか。決してそうではありません。パウロが主イエス様から受けた新しいいのちそのものが、自然にパウロをして、ユダヤ教から脱皮させたのです。パウロには、理屈ではなく、ただ経験があっただけです。パウロは、死といのちを知っていました。なぜなら、彼自身が「死んで」また「よみがえり」、その力を自分のものとして経験したからです。パウロはまた、主のご支配を理屈でなく体験的に知っていました。それはパウロが実際に主を自分の主として認め、自分を主の奴隷として生き通したことを見れば明らかです。

> さて、主の囚人である私はあなたがたに勧めます。召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。（エペソ 4･1）

> こういうわけで、あなたがた異邦人のためにキリスト・イエスの囚人となった私パウロが言います。（エペソ 3･1）



パウロは、ローマの皇帝、暴君ネロによって捕らえられたとき、自分は「ネロの囚人である」とは言いませんでした。パウロは心の底から喜びをもって、「私はキリストに捕らえられた、主イエスの囚人である」と証ししたのです。

これと同じように、パウロは、主のからだである教会についても、理論的に学んだのではなく、体験的に教えられたのでした。パウロはかつてサウロと呼ばれていたとき、イエス様に従う人々を迫害するため、ダマスコへの道を急いでいました。そのときパウロは、イエス様を迫害しようとは考えていませんでした。なぜなら、イエス様はもうすでに地上にはおられなかったからです。しかしそのときイエス様はパウロに現われ、**「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」**(使徒 9･4)とおっしゃいました。「なぜ、信者を迫害するのか」ではなく、「なぜ、わたしを迫害するのか」とおっしゃったのです。このとき、パウロは高く天におられる主イエス様と地上の信者たちとはまったく一つのものであることを感じとったに違いありません。そしてパウロは、自分が主イエス様のからだである教会の一部分にすぎないことを、次第にわかるようになりました。

パウロも最初は、少ししかイエス様のことを知りませんでした。しかし、もっとイエス様のことを知るためには、他の救われた兄弟姉妹と共に生きなければならないことを理解したのです。パウロがダマスコへの途上で主に出会った直後、アナニヤが来て、**「兄弟サウロ。あなたが来る途中でお現われになった主イエスが、私を遣わされました」**(使徒 9･17)と言いました。パウロは回心した直後から、主にある兄弟であるアナニヤを、主からいただいたのです。自分一人だけでは、決して前に進むことができないからです。私たちの信仰生活を振り返ってみるとき、どんなに多くの事柄を他の兄弟姉妹たちに負っていることでしょうか。一人で何かをやろうとして、失敗したことも多かったのではないでしょうか。パウロは、アナニヤに向かって「あなたは何者だ。私と何の関わりがあるのか。私は自分一人で主を知ったのだ」とは言いませんでした。パウロはイエス様に直接会いましたが、アナニヤの助けと奉仕がなかったなら、信仰の第一歩すら踏み出せなかったのです。パウロは、主のからだである教会、つまり信じる者の集いが、いかに大切なものであるかを、一番最初に学んだのです。

パウロは自分が洗礼を受けたその日から、自分は主のからだである教会の一部分にしか過ぎず、主イエス様だけが、ご自分の教会の頭であり、支配者であり、導き手であることを知っていました。パウロは主のからだである「全世界の教会」を見たとき、「自分は主を見た」という誇りはどこかに消え去り、自分がいかに小さな存在にすぎないかを知りえたのです。

私たちは主に対する知識が大切であることをよく知っています。しかし、主イエス様を教会

の頭として見るなら、私たちの持っている主についての知識がいかに少ないものであるかがわかるでしょう。

私があなたがたに会いたいと切に望むのは、御霊の賜物をいくらかでもあなたがたに分けて、あなたがたを強くしたいからです。というよりも、あなたがたの間にいて、あなたがたと私との互いの信仰によって、ともに励ましを受けたいのです。

(ローマ　1・11,12)

霊的な成長のために、主にある兄弟姉妹は、お互いの助けを必要としています。「あなたがたが、すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができますように。」(エペソ　3・17-19)と、パウロは祈っていますが、この中の「知る」という言葉は、原語では「理解する」だけでなく、「完全に知るように」という意味です。あなたは主イエス様を完全に知りたいと思っているでしょうか。私たちは自分のわずかな主への知識で満足していてよいでしょうか。

人は、数年間、信仰生活を送ると、もう主をよく知っているかのように考えてしまいがちです。パウロは次のように書いています。

私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。(ピリピ　3・12)

「主を完全に知りたい」、これが私たちの目的でなければなりません。

教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。(エペソ 1・23)

ここには、「完全な主イエス様」のことが示されています。「いっさいのものをいっさいのものによって満たす」完全な主の姿が描かれています。主イエス様はそのすべてをもって、ご自身のからだである教会を満たしたいと願っておられます。教会は「主イエス様」の満たしそのものです。ですからパウロは、エペソ人への手紙3章18節で「すべての聖徒とともに」と強調したのです。この主イエス様を完全に知るには、他の信者と共に一つになるという生活が必要です。主のみからだですから、「すべての聖徒と共」でなければ、主は本当の意味で用いられることがおできにならないのです。

たしかに、主の恵みによって救われた私たちは、もっともっと主イエス様を知りたいと願っています。しかし、一人ではそれが不可能であることも、十分承知しているでしょうか。あなたは自分一人の力で、主を知りたいと願っておられませんか。もしそうなら、あなたは、一人でもがいているだけで、真の心の成長をとげることはできません。もちろん、主は個人的に導いてくださり、霊性を高めてくださいます。一人で聖書を読み、静かに黙想することも大切です。しかし、そのとき、他の兄弟姉妹にも考えが及んでいるべきなのです。主イエス様は一人一人を見られるとともに、からだである教会全体を見ておられます。私たち救われた兄弟姉妹の群れは、もっといっしょに主を知り、いっしょに祝福されるように祈りたいものです。

私たちは主を知れば知るほど、実は主についてほとんど知っていないということを告白せざるを得ません。もし、自分の成長、進歩だけに目を奪われ、他の兄弟姉妹のことに考えが及ばないなら、それはすでに「自分は知っている」、という自己満足になってしまいます。一方、他の信者といっしょに生きていれば、「自分がまだ主をほんの少ししか知らない者だ」、ということがよくわかります。

マタイの福音書11章29節で主イエス様は、「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。」とおっしゃっておられます。そして、パウロはエペソ人への手紙4章2節で「謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合いなさい。」と言っています。つまり、主を知ることと、謙遜、柔和には深い関係があるのです。

ですから、他の信者との交わりがなければ、謙遜と柔和を限りなく持っておられる「心優しい」主イエス様を知ることなどできません。もし、あなたが一人だけで生活するなら、柔和と謙遜の尺度がなくなってしまいます。私たちは心の底から高ぶる者であり、おごれる者です。謙遜らしく見える人は、往々にして高ぶる人である場合が多いのです。

では一体、どうしたら謙遜になれるのでしょうか。ごう慢を治す薬があるのでしょうか。実はあります。それは「兄弟姉妹と共に生きること」です。しかしそれは、集会に来て隣に座った人の話を聞く、ということではありません。共に生きるとは、お互いがその喜びと悲しみを分かちあう生活を言います。また同じ目的を目指す生活を言います。救われた兄弟姉妹の群れは、お互いの霊的成長の場、証しの場、共に戦う場、また共に満たされる場です。このことが心からわかる人々は幸いです。そのような人は、自分の興味、願い、目的を否定してかかります。自分の心の動きを否定してかかることは、言うのは簡単ですが、実際にはなかなか難しいことです。自分の生まれながらの性質、考え、目的などは、信者の交わりにとって妨げになります。

天上におられる主イエス様を知ることと、地上にいる兄弟姉妹の内に宿っておられる主イエス様を知ることとは、まったく同じことです。

私たちは一人一人の兄弟姉妹の内におられる主イエス様を見ているでしょうか。他の兄弟姉妹と共々に、主イエス様をよりよく知ろうとしているでしょうか。遠く離れた所にいて愛することはきわめて簡単です。しかし、共に生活しながら互いに愛するのは、非常に難しいことです。「自分が何かの役割を演じたい」というような古い性質は、まったく打ち砕かれなければなりません。

私たちは、今、主を追い求め始めたのです。前にも見ましたように、パウロでさえ、「私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。」(ピリピ　3･12)と言っています。そしてこれらの結末はどうなるかというと、エペソ人への手紙3章21節にあるように「教会により、またキリスト・イエスにより、栄光が、世々にわたって、とこしえまでありますように。アーメン」に至るのです。

私たち一人一人にではなく、主イエス様おひとりに栄光がありますように。主の目から見ると、からだである教会は、あの信者、この信者という複数からなるのではなく、ただ一つの人格、主イエス様おひとりなのです。イエス様だけが父のみこころにかなう方であり、私たちは主イエス様のみからだの一部としてのみ、主のみこころにかなう者となれるのです。

旧約聖書を見ると、聖なる神がその宮に満ちた時、そこにとどまりえる人間など、一人もいなかったのです。

ですから、もし、聖霊の宮で、つまり兄弟姉妹の群れで、何らか役割を演じようとするなら、その人は動きがとれなくなってしまいます。真の教会は、多くの人々ではなく、ただ一人主イエス様ご自身のものであり、私たちはそのからだの一部分に過ぎません。真の教会におけるご奉仕もこれとまったく同じです。主イエス様は信者たちの絶対的な支配者です。ですから主イエス様が伝道する人々を立て、助ける人々を立て、ともに悩む者、主イエス様だけを示す者たちをお立てになるのです。

なぜ、ある人は福音を宣べ伝える者になり、別の人は日曜学校で主イエス様のことを話す者になるのでしょうか。それは神学校を卒業したからでしょうか。または生まれながらにして能力があるからでしょうか。決してそうではありません。

主イエス様によって捕らえられた主のしもべ、また自分の無能力を深く知り、日々御霊に導かれている人々が、ただ単に主のお命じになる仕事をしているにすぎないのです。

自分がまったく無力な者であると知り、自分の動機と考えを憎むことができ、信者の交わりのうちに自分の存在が消えてしまうことを、そして栄光が主にのみ帰せられることを喜べる人は幸いです。

主が主ご自身の栄光のために、私たちをそこにまで導いてくださいますように。

真理を求めて

「わたしは、真理のあかしをするために生まれ、このことのために世に来たのです。真理に属する者はみな、わたしの声に聞き従います。」(ヨハネ　18・37)

I

私は学生時代、救いを求めて吉祥寺キリスト集会に通っていた頃、ルターの回心のことを書いた「真理を求めて」という小冊子を繰り返し読んだ記憶があります。ルターが聖書の真理を求めて苦闘し、ついに「信仰による神の義」という救いの奥義を見出して、魂の不安と苦悩から解放された経緯が要約されていたと思います。

その小冊子から何を教えられたかは、あまり記憶に残っていませんが、「真理を求めて」という題名だけは記憶に刻まれており、今でも、ありがたい題名だった、と思っています。それは、この救いが特定の宗教の教義に基づくものではなく、この世界、全宇宙における普遍的で絶対的な真理に基づくものだということを、私に示してくれていたからです。こうして、救いというものは万人に当てはまる絶対的な真理に基づくものであり、この真理を知ることによってこそ自分の抱えている問題、人生の根本問題の真の解決が見出されるのだ、との思いを強くさせられたのです。

みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまえのない者に悟りを与えます。(詩篇　119・130)

ですから私は、聖書をキリスト教の教典としてではなく、真理が啓示されているらしい本として、すなわち「真理の書」として学ぶつもりで集会に通っていました。聖書が示している真理とは、いったい何なのか、本当にそれが自分の抱えている問題の解決になるのか、それを知りたかったのです。

当時、自分の抱えていた問題とは、自分が何のために生きているのかわからない、自分がどこから来てどこへ行くのかもわからない、さらには自分自身が何者なのかもわからないという、実にやっかいな問題でした。この問題に気づいて初めて、私は、人生には人間の力では絶対に解決不可能な問題があるのだと悟り、戦慄したのでした。それまでにも、人間は必ず死なねばならないということは、わかっているつもりでした。しかし、この頃になってやっと、死の真の意味に気づかされて、にっちもさっちもいかなくなったのです。自分の人生の意味を全否定する死という絶対的な壁の前に立って、絶望と恐怖におののき必死に耐えながら、その必死の我慢が崩れるのは時間の問題だ、とも感じていました。安眠はもちろんのこと、食欲すらも消え失せてしまいました。その時から、この世はいつもと変わりなく動いているのに、自分にとってはまったく別物になりました。私は心身共に健康のつもりでいながら、内面では絶望の叫びをあげているようなありさまでした。

今になって振り返ると、このような予想もしない突然の事態は、その2,3カ月前からベックさんの聖書研究会で聖書のみことばに触れるようになっていたからだ、と思います。聖書のみことばが私の心のベールを剥ぎ取って、真実を見る目を与えたのでしょう。それまでの私は、「見ても見ず、聞いても聞かぬ」心の目を覆われた頑迷な者でした。絶望の人生を生きながら、それがバラ色の人生であるかのように錯覚していたのです。

みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまえのない者に悟りを与えます。(詩篇　119・130)

**神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。
それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、
永遠のいのちを持つためである。（ヨハネ　3・16、17）**

**しかし、イスラエルの人々の思いは鈍くなったのです。というのは、今日に至るまで、古い契約が朗読されるときに、同じおおいが掛けられたままで、取りのけられてはいません。なぜなら、それはキリストによって取り除かれるものだからです。
（２コリント　3・14）**

このように、今にして思えば、いっさいは生きておられる神の憐れみと導きによるものであることは間違いないのですが、当時の私は、聖書を、神の真実なことばとしてではなく、ただ真理を示す書として、真理なるものを見出したいがゆえに知ろうとしていたのです。

Ⅱ

しかしながら、真理の第一歩は真の神のご存在です。神のご存在という問題に触れないまま、この問題を迂回して真理の発見はありえません。人は、聖書を通して直接自分に語りかけておられる神のご存在に気づくまで、聖書を真に理解することはできない、のではないでしょうか。聖書の文字の中に真理を求めるのではなく、この文字を通して自分に語っておられる神ご自身に気づき、生きておられる神に心を向け、神を仰ぐようになる時に初めて聖書の文字はいのちのことばとして魂の中に入ってくるのです。聖書は自分個人に対する神の愛に満ちたプライベートな手紙なのだ、と気づくまで、人は真理を求めて何と苦渋に満ちた遠回りをすることでしょうか。

イエス様が教えてくださったように、私たちの「天の父」であられる神は、肉の父が私たちを愛する以上に、私たちを愛しておられ、私たちを祝福したくて仕方がないお方であること、だからこそ正しい道、いのちの道を歩むように教え、戒め、諭してくださること――この神の愛がわかるようになれば、あれほど解決不可能と思えた人生問題というものも、いつの間にか消失してしまうのです。

すなわち、あの虚無と絶望と死への恐怖は、すべて、この神の愛を見失っているという事態から生じているのです。人間が神など必要ないとして、神に背を向け、逆らって生きているという事態、これこそが人間の根本的な罪であり、人生問題の根源です。ですから真理の発見とは、キリスト教の教義の知的な理解や、内省による何らかの悟りのことではなく、真の愛の神の発見、生ける神への立ち返りにほかならないのです。

しかし、愛の神の発見と神への立ち返りは、真実な罪の悔い改めなしには起こりえません。そのためには、聖書のみことばと正直に向き合うことがどうしても必要です。自分を偽ったまま真理に近づくことはできないのです。なぜなら、神は真実なお方であるからです。私たちが偽りを捨てる決心をし、自分の罪を認める勇気を持ち、心から赦しを乞うなら、神は赦してくださるだけでなく、その罪から私たちをきよめ、罪の力からも解放してくださいます。

**もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません。
（１ヨハネ　1・8～10）**

しかし、私たち人間の側の悔い改めだけで罪の問題は完全に解決されるのでしょうか。そうではありません。それでは神の義は全うされないからです。神はいかなる罪をも看過することのできない義にして聖なるお方だからです。

そのためになされたのが、御子イエスの十字架の死による罪の贖いでした。全人類の罪を贖うためには、罪のない御子イエスの身代わりの死が必要だと神は判断されたのです。全人類の罪を贖いうるのはただお一人、神ご自身のひとり子だけであるとは、神にとってなんという悲劇でしょうか。私たちの罪と救いのために、最も苦しまれたのは神ご自身なのです。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、

御子によって世が救われるためである。
（ヨハネ　3・16、17）

すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。それは、今の時にご自身の義を現わすためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです。（ローマ　3・23〜26）

私たちが、御子イエスの贖罪の死をもって差し伸ばしておられる、神の和解の御手を受け入れ、みもとに立ち返る時、神は私たちを「義」と認めてくださるのです。

神は、キリストにあって、この世をご自分と和解させ、違反行為の責めを人々に負わせないで、和解のことばを私たちにゆだねられたのです。こういうわけで、私たちはキリストの使節なのです。ちょうど神が私たちを通して懇願しておられるようです。私たちは、キリストに代わって、あなたがたに願います。神の和解を受け入れなさい。神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです。
（２コリント　5・19〜21）

ルカの福音書15章に書かれている、あの放蕩息子が自分の罪を悔い改めて父のもとに帰った時、父は大喜びで迎え入れ、彼に義の印としての最上の衣を着せたばかりか、子の身分の印としての指環をはめさせました。イエス様を自分の義として受け入れる私たちをも、神はご自分の子どもとしてくださる、と聖書は約束しています。

この方はご自分のくにに来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。（ヨハネ　1・11、12）

あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって「アバ、父。」と呼びます。私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいます。もし子どもであるなら、相続人でもあります。
（ローマ　8・15〜17）

神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられたのです。（エペソ　1・5）

このように、人は、神の提供する救いそのものであるイエス・キリストを信じ受け入れる信仰によって、神の御前に「義」と認められ、「神の子」としての身分を授けていただけるのです。

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるのではありません。だれも誇ることのないためです。（エペソ　2・8、9）

救いは最初から最後までキリスト・イエスへの信仰によるのであって、人の行いによるのではないのです。これが救いに関わる真理の第二でしょう。この救いの土台から離れるならば、私たちはサタンの攻撃の前に逃れ場を失い、ふみにじられることになります。この信仰の土台から離れれば、主の正しい道を歩み続けることは不可能です。なぜなら、自らを省みて良心の痛みを覚えない人はひとりもいないからです。しかし、私たちは自分自身の行いや状態にではなく、いつでもただ主イエスの贖いの御業にのみ拠り頼みます。

私は神の恵みを無にはしません。もし義が律法によって得られるとしたら、それこそキリストの死は無意味です。
（ガラテヤ　2・21）

救いの真理の第三は、主との交わりの中

に留まり続けることです。それこそが祝福された人生の秘訣と言えるのではないでしょうか。主との交わりの中に留まるとは、私たちの心の中のすべてをご存知の主の御前を歩むということです。

私はいつも、私の前に主を置いた。主が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。それゆえ、私の心は喜び、私のたましいは楽しんでいる。私の身もまた安らかに住まおう。（詩篇　16・8、9）

また、頑なさと高ぶりを捨て、悪はどんな悪でも心して避け、つねに光の中を歩むことです。サタンが最も好むものは暗闇であり、最も嫌がるものは光ですから。光の中を歩む人にサタンは近づくことはできないのです。

神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです。もし私たちが、神と交わりがあると言っていながら、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであって、真理を行なってはいません。しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。（１ヨハネ　1・5〜7）

悪いことをする者は光を憎み、その行ないが明るみの出されることを恐れて、光のほうに来ない。しかし、真理を行なう者は、光のほうに来る。その行ないが神にあってなされたことが明らかにされるためである。（ヨハネ　3・20、21）

あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。―光りの結ぶ実は、あらゆる善意と正義と真実なのです。―（エペソ　5・8、9）

私たちはかつて罪を罪とも知らないまま、まるでゴミ箱をあさり回っている野良犬のように虚しいものを追い求めながら、高ぶりと愚かさと汚れの中に深く沈んでいた者です。そのような滅びの中から救い出された今となっては、それは顧みるだにおぞましい人生です。そのような人生への逆戻りはもうゴメンです。

こうしてあなたがたは、地上の残された時を、もはや人間の欲望のためではなく、神のみこころのために過ごすようになるのです。あなたがたは、異邦人たちがしたいと思っていることを行ない、好色、情欲、酔酒、遊興、宴会騒ぎ、忌むべき偶像礼拝などにふけったものですが、それは過ぎ去った時で、もう十分です。（１ペテロ　4・2、3）

聖められることを追い求めなさい。聖くなければ、だれも主を見ることができません。（ヘブル　12・14）

あなたがたを召してくださった聖なる方にならって、あなたがた自身も、あらゆる行ないにおいて聖なるものとされなさい。（１ペテロ　1・15）

神のみこころは、あなたがたが聖くなることです。（１テサロニケ　4・3）

主と共に光の中に留まるなら、私たちの人生は祝福にあふれたものになることは間違いありません。クリスチャンは信仰の力によって、この世の悩みと格闘するというようなレベルに留まってはいけません。悩みはすべて罪との関わりから生まれるものだからです。あらゆる罪―霊肉の汚れ（2コリント　7・1）―から離れて、クリスチャンの目標である主の祝福から祝福へと進もうではありませんか。



蘇畑卓郎
東京富士大学教授。
1945年奄美大島生まれ。
大島高、早稲田大学政経学部卒。

目的を持って歩む人生

PURPOSE



最近、新聞や雑誌、テレビなどでニートという言葉に触れることがあります。ニート（NEET）は「職業に就いていないし、学校に通ってもいない、そして働くための準備・訓練もしていない」ことを意味する英語（Not in Employment, Education or Training）の略語です。そのような若者が現在、日本に68万人もいる、と推定されているそうです。ニートになった若者には、「社会に出て行く自信を失っている人」や「社会との関係を築けずに、こもっている人」、あるいは「何をやっていいのか分からずに悩んでいる人」、「苦労をしたくない人」など様々なタイプがある、と言われます。おそらく多くの人は、何のために自分が生きているのか分からないのではないでしょうか。

しかし、このことは、ニートに限らず、多くの現代人に当てはまると思われます。毎年、世界で約100万人もの人々が自ら命を絶っている、という悲しい現実も、そのことを示唆していのではないでしょうか。

では、私たちは何のために生きているのでしょうか。人生の目的とはなんでしょうか。

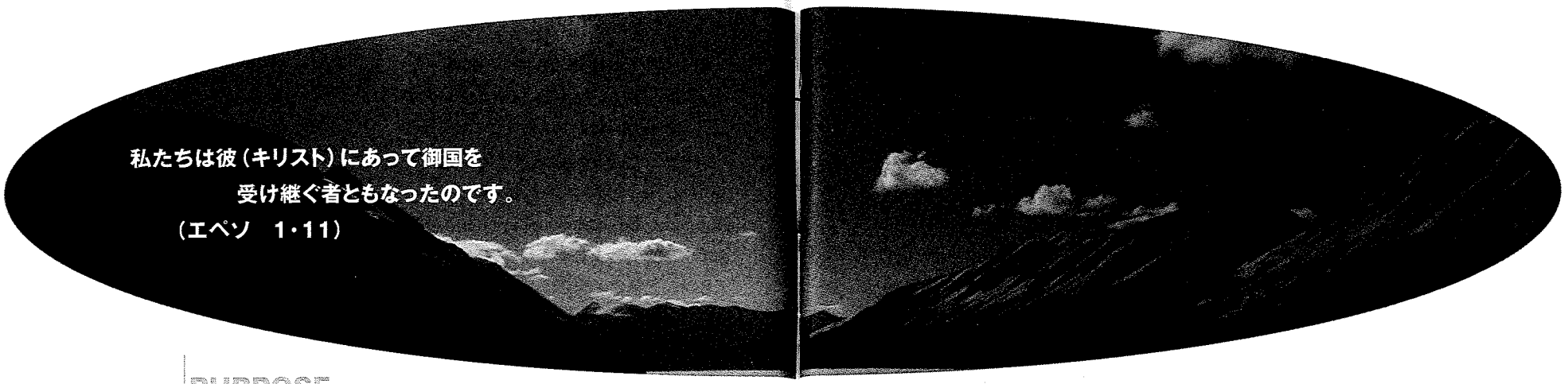
その答えを探る方法は、二つあると思います。一つは人間の思索による方法、つまり自分の頭で考えて答えを見つけようとするものです。もう一つはイエス様に尋ねる、言い換えますと「聖書の中に答えを見出そうとする」方法です。

自分の頭で考えることは、多くの哲学者や作家、知識人がやってきたことですが、万人が納得するような結論は出ていない、と言えるのではないでしょうか。人生の目的はこうだという決定版の答えが出されたという話は聞いたことがありません。よく言われるのは「自己実現」ということですが、これもひとりよがり、あるいは自己満足に過ぎないように思えます。

例えば、あるスポーツ選手が「自分の人生の目的はオリンピックで金メダルを取ることだ」と定めて、仮に金メダルを取ったとしても、取った瞬間に人生の目的は達成されてしまい、その後の人生は目的を失ったものになります。金メダルを取れなかったら、人生の失敗者となります。お金持ちになることを人生の目的にした人は、どれだけお金をためるつもりでしょうか。スポーツ選手にしても、実業家にしても、いずれ知力、気力、体力が衰えて引退するときを迎え、そのときには、生きる目的を失うことになります。

これらの例は、どれも自分というものを出発点にして人生の目的を定めています。自分はこうありたい、自分の目標、自分の野心、自分の将来は何か——と、自分自身に焦点を合わせています。しかし、そのような考えはやがて行き詰る、生きている意味をはっきりつかむことができない、ということではないでしょうか。3000年前、当時世界一の知恵者と言われ、思い通りに富と権力を手にしたソロモン王も、財産や名声、快楽などはすべて空しいと、聖書に書き記しています。

「私は事業を拡張し、邸宅を建て、ぶどう畑を設け、また、銀や金、それに王たちや諸州の宝も集めた。人の子らの快楽である多くのそばめを手に入れた。しかし、私が手が



PURPOSE

目的を持って歩む人生

けたあらゆる事業と、そのために私が骨折った労苦とを振り返ってみると、なんと、すべてがむなしいことよ。風を追うようなものだ。」（伝道者　2・4、8、11）

そこで、もう一つの方法、神に尋ね求める、「聖書の中に答えを見つけよう」ということに目を向けますと、これこそが唯一の解決の道であることは明らかです。なぜなら、私たちの人生の目的は、私たちを創造された方、神が考えられたことであるからです。聖書には、そのことがはっきり書かれています。

主（神）はすべてのものを、ご自分の目的のために造り…（箴言　16・4）

神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられたのです。それは、神がその愛する方によって私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。（エペソ　1・5、6）

私たちは彼（キリスト）にあって御国を受け継ぐ者ともなったのです。私たちは、みこころによりご計画のままをみな実現される方の目的に従って、このようにあらかじめ定められていたのです。それは、前からキリストに望みを置いていた私たちが、神の栄光をほめたたえる者となるためです。（エペソ　1・11、12）

このみことばで、明らかなように、神は私たち人間を「自分の子」つまり「神の子」にする目的で造られました。また、御国を受け継ぐ者にするため、神のご栄光をほめたたえる者にするために造られました。

しかし、私たちは「神の子」としては、生まれてきません。生まれたときの私たちは、神の前に出ることのできない「罪に汚れた者」です。聖書の創世記3章には、最初の人であるアダムとエバが神の命令に背いて罪人となり、エデンの園から追放されてしまったことが書かれています。その罪の性質を、アダムの子孫である私たち人間は皆、受け継いでいるのです。こういうわけで、生まれつきの人間は罪人であり、「神の子」ではないのです。でも、神のみこころは人間が「神の子」になることですから、私たちはまず第一に「神の子」になる必要があります。

罪人である私たちが「神の子」になるには、罪の問題が処理されなければなりません。その問題は、神の御子イエス・キリストが解決してくださいました。イエス様は私たちのすべての罪をその身に負い、私たちの身代わりとなって、罰を受けてくださいました。その罰によって十字架にかけられ、流された血で、私たちの罪を洗い清めてくださったのです。そして、このことを信じ、イエス様を救い主として受け入れた者に「神の子」となる特権を与えてくださいました。イエス様がその愛によって一方的に与えてくださった恵みです。

この方（イエス様）を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子となる特権をお与えになった。（ヨハネ　1・12）

「神の子」になるということは、神を父とする「神の家族」の一員になることです。同じ信仰を持つ人たちと兄弟姉妹の関係になることでもあります。そして「神の子」になったときから、その人の人生は大きく変るはずです。神のご計画の光に照らされた生活を営むようになるからです。生きる土台となる価値観が変り、人生の目指す方向が変る、と言って

もよいでしょう。

しかし、「神の子」になることは、人生の目的の第一段階であって、それでおしまい、ということにはなりません。「神の子」としての務めが待っているからです。まず「神の家族」の中で、しっかりした親子関係、兄弟関係、姉妹関係を築くことが求められます。その基本は「愛する」こと、父なる神を愛し、兄弟姉妹を愛することです。イエス様も一番大切なこととして「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」(マルコ　12・30)と言われ、次に大切なこととして「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」(マルコ　12・31)とおっしゃいました。それからもう一つ、家族の「交わり」を持つことも大切です。父なる神や御子イエス様と交わり、兄弟姉妹と交わることです。祈りによってイエス様に語りかけ、聖書のみことばを通してイエス様の語りかけに耳を傾けることが許されています。私たちが心を注ぎだして祈るとき、イエス様はその祈りを聞いてくださいます。「あなたがたが信じて祈り求めるものなら、何でも与えられます。」(マタイ　21・22)とイエス様は弟子たちに言われました。イエス様は、私たちが交わりを求めてくるのを待っておられるのです。

では、一番大切な「主を愛する」とは、どういうことでしょうか。それは主を敬い、主のことば・命令を守ることです。

「だれでもわたし(イエス)を愛する人は、わたしのことばを守ります。」
(ヨハネ　14・23)

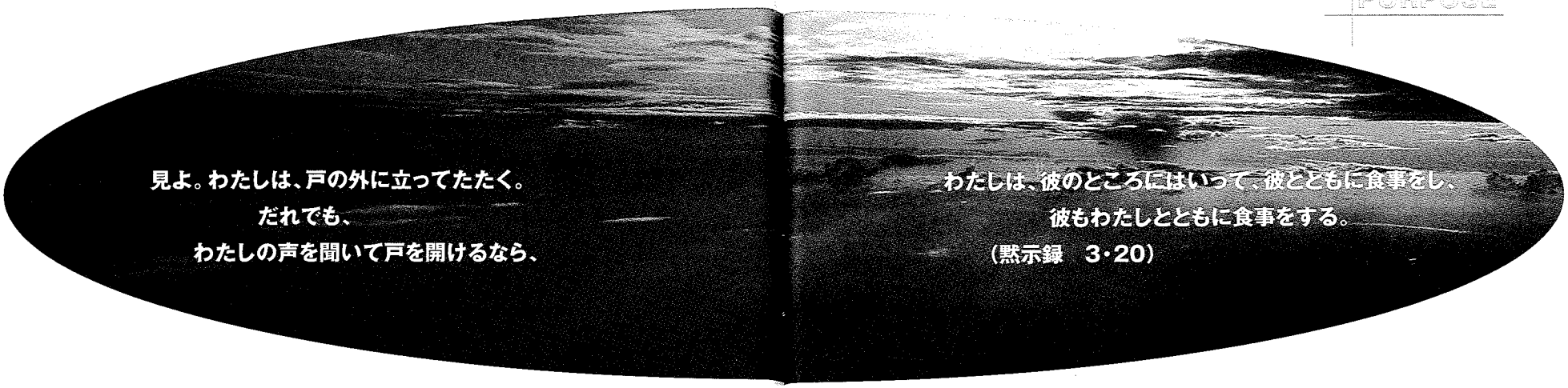
主の命令を守る、ということを噛み砕いて言いますと、自分の思いを捨てて、みこころに素直に従う、ということです。人それぞれに自分の思い、願い、望みなどがありますから、それを捨てることなど無理だと多くの人は考えるでしょう。でも、そこであきらめる必要はありません。人間にはできなくても、イエス様はどんなこともできるお方です。そのイエス様に信頼して、「私にはできません。でも、あなた様に従いたいですから、あなた様ができるように助けてください」と祈り求めるのです。すると、主の与えてくださる御霊(みたま)の働きで、自分の思いは変えられるでしょう。これは信じる者が体験することのできる事実です。聖書は、次のようなイエス様のことばを記しています。**「父(神)はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。…その方は、真理の御霊です。」(ヨハネ14・16、17)**

こうしてイエス様を受け入れた人、「神の子」となった人は、新しい人に生まれ変わり、みこころに従う新しい生活を始めます。自分を主に明け渡した人生に入る、と言ってもいいでしょう。そのような生き方を「主とともに歩む」「主の道に歩む」「主にあって歩む」などと、聖書は表現しています。ノア、アブラハム、ダビデといった“信仰の先輩”たちは皆、そうした歩みをして、祝福された人生を全うしました。**信仰の創始者であり、完成者(ヘブル　12・2)**と言われるイエス様も、いつもご自分を無にされ、父なる神のみこころに聞き従っていました。みことばを大切にしていました。そのイエス様に見習い、「神の子」として主に従う歩みを全うできれば、主は大いに祝福してくださるでしょう。そのような道を真直ぐに走り通すこと、それによってイエス様の光を放つこと、そして御国を受け継ぐ者になること、それこそが私たちの人生の目的ではないでしょうか。

PURPOSE

あなたがたが信じて祈り求めるものなら、
何でも与えられます。
(マタイ　21・22)

目的を持って歩む人生



目的を持って歩む人生

主に従う歩みとは、どのような歩みを指すのでしょうか。近くにいる人々を愛したい、と祈り求める歩みです。イエス様を紹介したい、と切に願う歩みです。周囲の人々のつまづきにないならないよう、行いに心を配る歩みです。そのような歩みは、生まれながらの人間には無理なことばかりで、日々イエス様に頼り、それでも挫折して、悔い改めさせられることでしょう。そして、そのような祈りと悔い改めの毎日の中で、主を賛美、礼拝することです。そこには試練や、ときには犠牲も伴うでしょう。けれども、試練とともに脱出の道も備えてくださる、と聖書は述べています。

そのうえ、主とともに歩むことは、だれにもできます。特別な才能は必要ないのです。年をとっても、病の床にあっても可能です。重い病気にかかったある人は、朝に夕にイエス様に祈りました。この人は死の床にあって、永遠の命を確信して、希望と平安に満たされていました。その姿は同室の患者さんたちを次々と信仰に導き、死の恐怖から解放するきっかけとなったのです。主とともに歩んだ一つの例です。このようにイエス様は、それぞれの賜物、境遇に応じて、最適の道を備えてくださいます。弱い人には弱い人なりの、強い人には強い人なりの道を用意してくださいます。どの道を歩む人も、主のご栄光を表わすことができるのです。

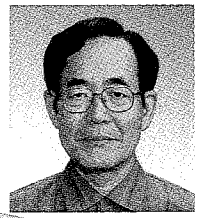
私たちの人生はたった一つしかない、取り返しのつかない人生です。その人生を、イエス様なしに歩むとき、それは永遠の滅びに向かう道である、と聖書は言っています。多くの人が、そのような、目的を持たない人生を送っています。初めに紹介したニートと呼ばれる若者たちや、人生に行き詰まって自殺を選ばざるを得ない人々の増加が、それを物語っているように思えます。イエス様なしに生きている多くの人たちは、人生の困難な場面に遭遇したとき、何に頼っていいかわからずに、立ち往生することが少なくないのではないでしょうか。特に死に直面したときはどうしようもなく、ただただ絶望と悲しみのうちに世を去っていくのではないでしょうか。

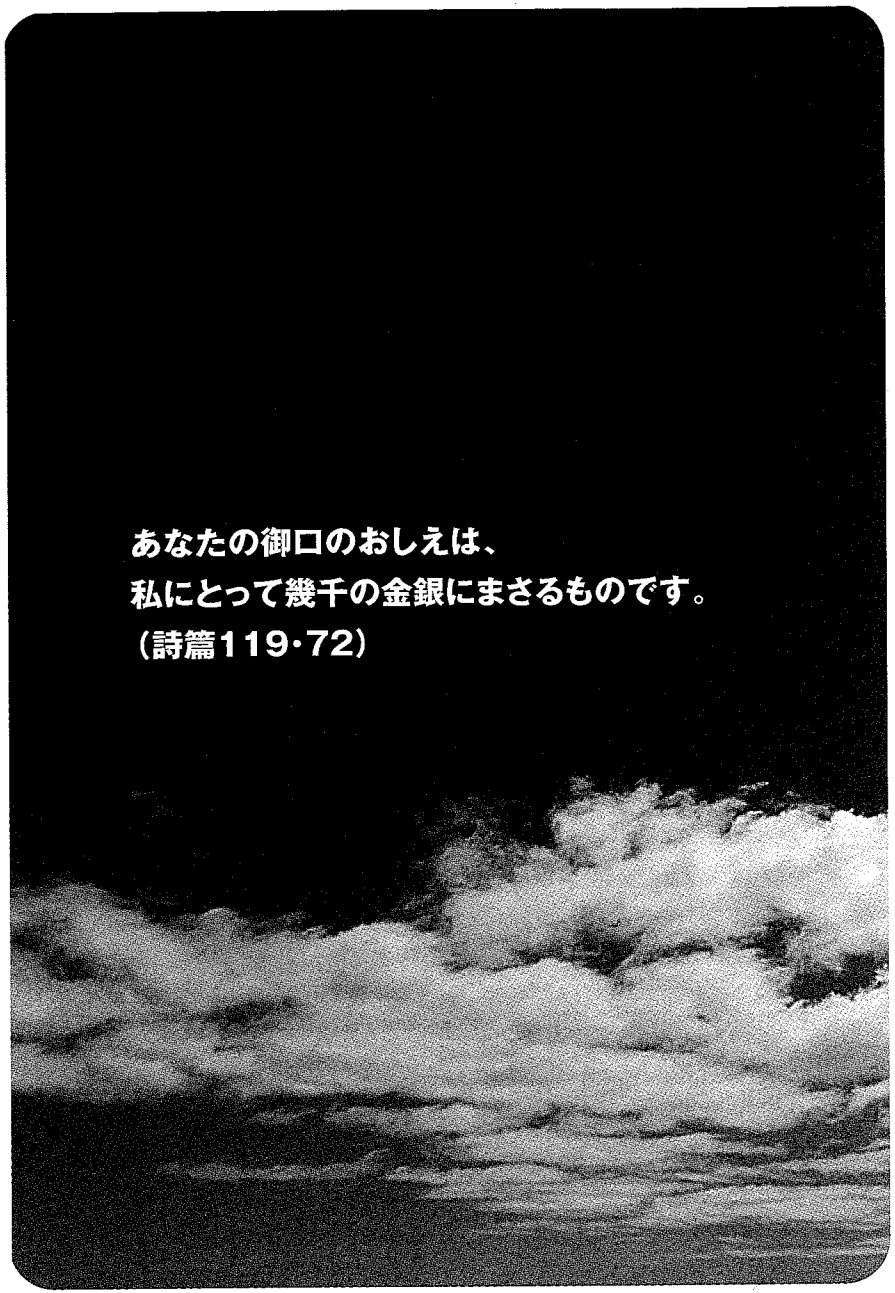
イエス様に信頼し、はっきりした目的と希望を持って歩んでいくことができる、とは何と幸いなことでしょう。主とともに歩んでいる人たちは、神との平和、心の喜び、試練のときの慰め、永遠のいのちの確信、罪の赦しなど、たくさんの恵みをいただいています。
まだ、イエス様をご存知でない方が、一日も早くイエス様を受け入れ、希望の人生に入ることを願ってやみません。イエス様は、すべての人が救われて、真理を知るようになる（1テモテ2・4）ことを望まれ、今日も呼びかけておられます。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。（マタイ　11・28）

見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。（黙示録　3・20）

清水　洋一
毎日新聞客員編集委員。1936年東京生まれ。新宿高、東京大学理学部卒、毎日新聞科学部長、論説委員。この間、中央公害対策審議会委員、学術審議会委員など。定年後、九州女子大学学生部長、教務部長、2000年親の介護ため退職。キリスト集会出版物編集。





人が生きる意味

もしあなたのみおしえが私の喜びでなかったら、私は自分の悩みの中で滅んでいたでしょう。私はあなたの戒めを決して忘れません。それによって、あなたは私を生かしてくださったからです。（詩篇119・92、93）

「私は自分のさだめに感謝しています。だって、私をこんなにひどい目にあわせてくれたんですもの」。

これは、フランクルの「夜と霧」に記録された、この世で残された生命は後数日しかないと知ったある女性の言葉です。彼女はまた次のように言いました。「以前、何不自由なく暮らしていたとき、私は甘やかされて、生きることの意味や心のありかたについて、真剣に考えたことなどありませんでした」。

けれど、この女性は、ユダヤ人の強制収容所の中で、死を迎える最後の数日、内面的に大きな変化をとげました。彼女は言いました。「収容所の窓から見える一本のマロニエの木が、一人ぼっちの私のただ一人の友達です。木はこう言うんです。“私はここにいるよ。私はここにいるよ。私はいのち、永遠のいのちだよ”って」。

現代に生きる多くの人々と同じく、この女性も平凡で幸せな日々を送っていたときには、心の深みに思いをはせることや、生きることの意味に真剣に向き合うことなど、必要ありませんでした。しかし、強制収容所という、残酷で容赦のない不条理な環境の中で苦しんだあげく、彼女は、目に見えないけれど、確実に自分に呼びかける存在があることに気づいたのでした。それは、「永遠のいのちそのものであるお方、主イエス様」でした。

「人はいったい、何のために生きている」のでしょうか。私たちがいま、このようにして生きている意味や意義は、どこにあるのでしょうか。

私たちの人生には、つまずき、行き詰まり、困難、病気、貧困、孤独などの苦しみがつきまといます。そして、苦しんでいるとき、私たちは生きている意味や意義、人間の根源的な問題に直面せざるをえません。主イエス様が、私たちに救い主としての臨在とご栄光を現わしてくださるのは、そのようなときです。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです。（詩篇119・71、72）

主は、はげしい苦しみを体験し、苦悩と向き合い、忍耐し、主に叫び、助けと導きを求める人々を、まことのいのちに導き、生きることの真の意義を明らかにし、人生全体を温かく

満たしてくださいます。このようにしてイエス様に出会った人々は、この詩篇の作者と同じように言うことでしょう。「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした」と。

いのちを与えるのは御霊です。
(ヨハネ6・63)

私たちがいくら苦しんでも、それだけでは何の意味もありません。でも、苦悩と試練を通して、主イエス様に出会えるとしたら、それこそは人生最高の意義であり、恵みであり、祝福です。「主イエス様に出会う」こと。これこそ、私たちが生きている、最も大きな「意味」ではないでしょうか。

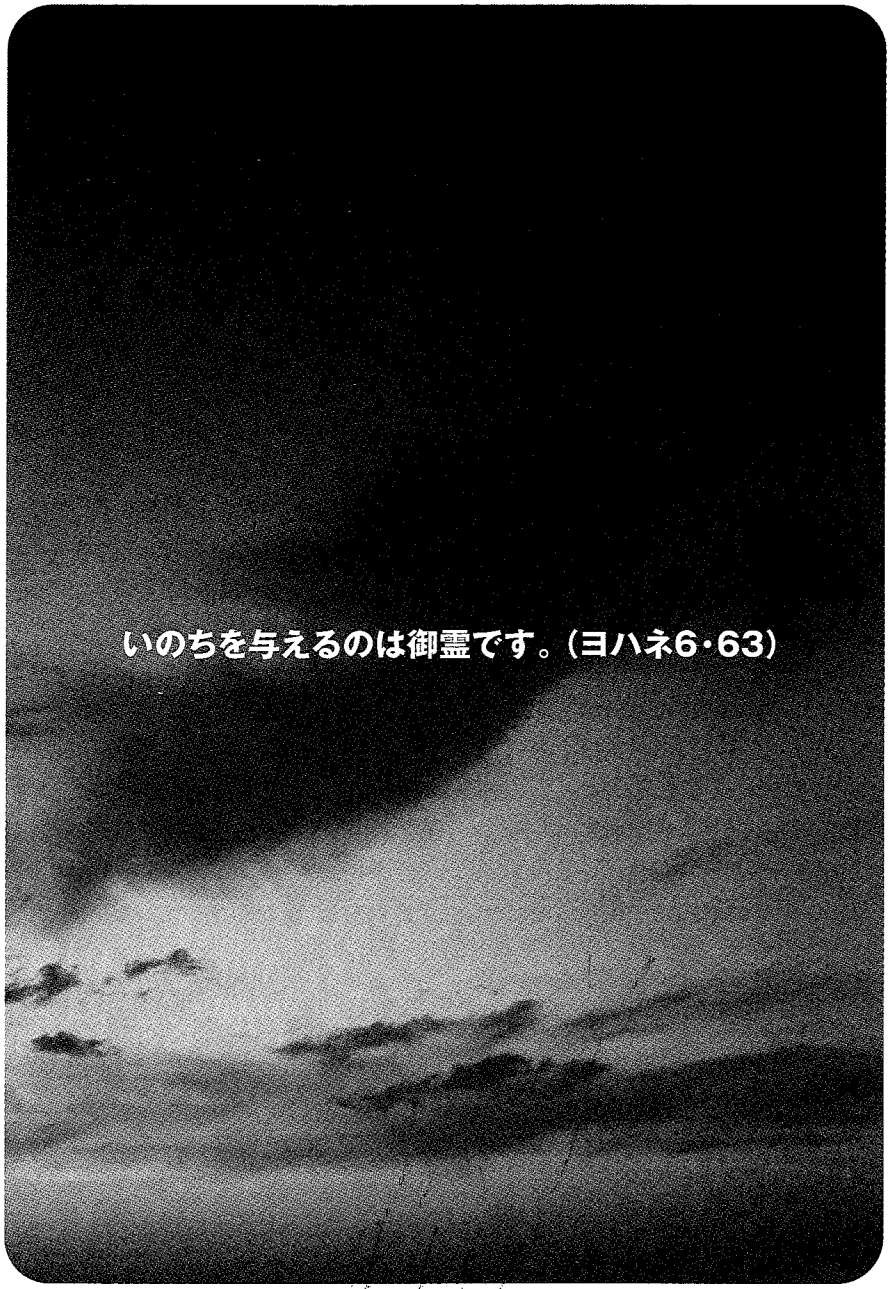
私たちが「人生の意味」を、自分の知識や能力によって見つけ出すことはできません。私たちの人生を「意義あるものにできる」のは、ただ、私たちを創造された神お一人です。ですから、私たちは、現在直面している問題、刻一刻と変化する状況への対処を、常識や自己の知力で解決しようとしても無駄であり、うまくいきません。ただ「主は、私たちに何を求めておられるのか」、それだけを生きる基準、問題解決の基準にしたとき、私たちの人生は、「主にあって」意義をもってきます。そしてそれこそが、真の「人生の意義」です。

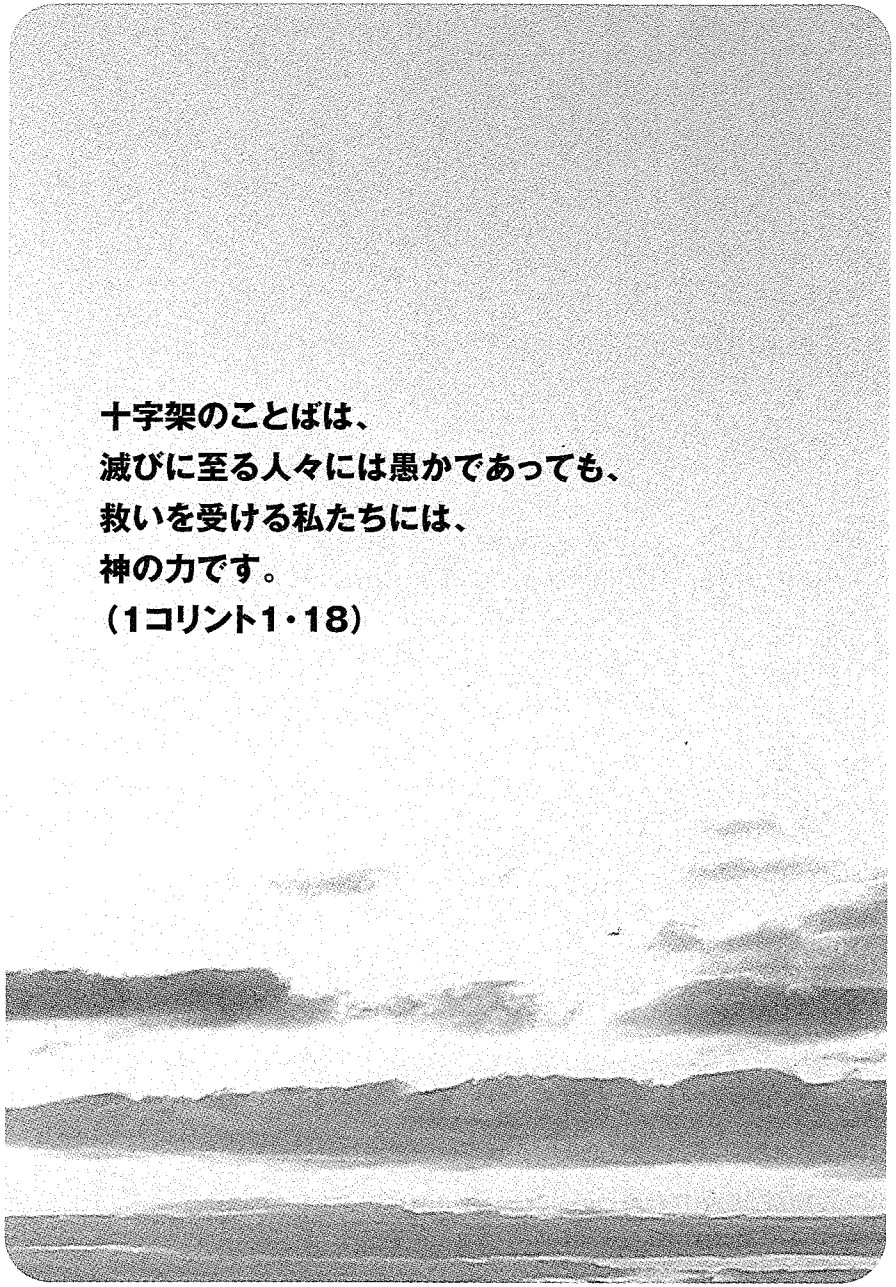
私たちは、主なる神によって、日々生かされているにすぎない存在ですから、主が備えてくださるいろいろな試練や労苦について、「主のみこころがどこにあるか」を、常に祈り、求め、主のみこころに従って生きるべきなのは当然です。そして、このように生きてこそ、私たちは、この世に生かされていることの真の意味、「人が生きる真の意味」を、主からいただくことができ、ゆるがない基盤の上に立った生活が可能となります。

さて、私は自分のことを振り返って見ますと、イエス様を信じ、その救いにあずかるという恵みがなかったなら、私は、「なぜ人生は、こんなに苦しみにあふれ、望みもなく、悩み続けなければならないのか」と思いながら、どこにもその答えを見出すことができず、虚ろな状態でさ迷い歩いていたに違いありません。

人間の頭では決して到達できないその解答を求めることに疲れて、虚無と無気力におちいり、目的なく無意味な享楽の日々を過ごしていたことでしょう。わが身を振り返ったとき、その虚しさ、恐ろしさに愕然となります。

主は私たちを、虚しく変動するこの世の価値観から解放し、「人が生きる真の意味」を与え、祝福してくださいました。主を信じる私たちは、苦しんでいても希望を持ち、悲しんでいても主を思えば心が暖まり、悩んでいても静かな平安を心に持っています。このよう





人が生きる意味

な平安と恵みの中で生きていけるとは、なんという恵み、なんという幸いでしょうか。

十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。（1コリント1・18）

私たちは、自分の知恵によっては、イエス様を知ることはできない、と聖書ははっきりと告げています。たしかに、私たちはイエス様を知るまでは、いわゆるこの世の幸福を手にしようと苦しみあがいていました。しかし、人間の持つわずかな知力や能力で、苦しみや人生の問題がすべて解決されるはずはありません。

事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教の言葉の愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。（1コリント1・21）

このみことばにある通り、主なる神は、イエス様を信じる者たちの「愚かな言葉」を通して人々を救いへと導こうと定められました。「愚かな」とは、初めて聞く人々には愚かに聞こえるということ、そして信者がどのように伝えようとしたところで主なる神の愛の真意を語り尽くすことは不可能だという意味です。そして彼らは、**「十字架のことばは……神の力です」（1コリント1・18）**と告白するようになったのです。

今現在、大きな苦しみと悩みの最中にあって、「生」というものに対して、その不思議さ、不可解さに直面し、人のいのちや生きざまに真摯に向き合おうとする方々、また、人間の内面や心に関心を持つ方々は、ぜひ聖書をお読みになることをお勧めします。聖書の言葉は不動の真理としてあなたの心に響いてくるはずです。そこに書かれてあるのは、天地を創造された主なる神の人間への語りかけです。その中から、主が語られる「人が生きる意味」のすばらしさを汲み取っていただきたいのです。

「人が生きる意味」を見出せず、虚しさと迷いの中にさまよい歩く方々、ぜひ一日も早く、まことの主なる神に出会い、苦悩や虚しさ、徒労感から解放されてください！

浅野寛治
1956年徳島県生まれ。
徳島大情報工学科卒。
日本テキサス・インスツルメンツ（株）情報システム部門ビジネスIT部長。



家族の救いと限りない希望

芳竹 勝也

私たち、妻と娘と私の三人家族は、表面上何の問題もない、仲の良い家族だったと思います。ところが13年前、妻が吉祥寺キリスト集会に集い始めて、一変しました。

長い教会生活の中で悩み苦しんでいた妻が、吉祥寺集会に導かれて初めて礼拝に出た日、突然、「イエス様は聖書で言われているとおり、生きておられる神様だった」と言ったのです。私から見ると、頭がおかしくなったのではないかと思える、一番嫌な期間の始まりでした。

当時、単身赴任をしていた私は、帰宅するのが楽しみでしたが、帰るたびにイエス様の話を聞かされて、いつしか帰るのが憂うつになっていました。教会も、集会も、同じ神を信じるなら同じではないか。たとえ夫婦でも親子でも、宗教は別でいいのではないか。神様について何も知らなかった、また知ろうともしなかった私は、こんな疑問をぶつけて反発していました。特別な能力、地位、財産のない私は、一生懸命努力して仕事をし、家族の生活を支えることが一番大切、それが男の務めだと考えていました。

人の目にはまっすぐに見える道がある。
その道の終わりは死の道である。
（箴言　14・12）

今、思うと、私の目にまっすぐに見えた道は、まさに「死の道」だったのですが、そんなことはつゆ知らず、御霊に従う妻の歩みと衝突していました。妻は根気よく、私にイエス様の話をし、キリスト集会に誘い続けましたが、私は聞く耳を持っていませんでした。

妻に引きずられるようにして参加した、私にとって二度目の「御代田よろこびの集い」では、私の意志や希望がまったく無視されて、突然ベックさんと話し合う場に入れられました。しかし、その時も、ベックさんのお話は何も耳に入らなかったばかりか、憤慨して、もう二度とキリスト集会には来ないだろうと思いました。



左から、長女 弥生子さん、勝也さん、妻 麗子さん

妻は集会の中で、多くの未信者のご主人たちが、ベックさんを通してイエス様に心を開き、信じる者に変えられていくのを見ていました。そして、私にも同じことを望んで、そのような場を備えてくれたのだと思うのですが、頑なな私の心は妻の期待を裏切り、悲しませただけでした。

しかし、そのような私をも、主は憐れんでくださいました。意志が強くない私は、その後も、気の進まないまま、よろこびの集いや家庭集会に参加していましたが、1993年夏の「御代田よろこびの集い」でのことです。どうして、そのような言葉を口にしたのか自分でもわかりませんが、「救われるためには、どうすればいいんだ」と妻に尋ねたのです。主イエス様が働いてくださった、としか考えられません。その時、妻は聖書の次のみことばを示してくれました。

もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」ユダヤ人とギリシヤ人との区別はありません。同じ主が、すべての人の主であり、主を呼び求めるすべての人に対して恵み深くあられるからです。「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」のです。
（ローマ　10・9～13）

この聖句を、私は妻といっしょに声を出して読んだ後、「今までイエス様を必要ないと思っていました。あなた様から離れていたこと、ごめんなさい」と告白して、祈りました。アーメンと祈り終わった時、涙があふれてきました。この時、主は私をとらえてくださったのだと思います。主に従っていく決心を、私は与えられました。

それまでの私は、なんでも自分でしようという自我、わがまま、自己中心のかたま

りでした。自分を第一として、自分を神としていたのです。このことが聖書の言う罪であることも、教えられました。その罪人の私のために、イエス様は身代わりとなって十字架にかかり死んでくださったのです。この救いの御業によって罪の問題すべてが解決されたということは、考えられない大きな恵みです。救われた喜びと感謝は、言葉では言い表されません。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。
(ヨハネ 3・16)

キリストも一度罪のために死なれました。正しい方が悪い人々の身代わりとなったのです。それは、肉においては死に渡され、霊においては生かされて、私たちを神のみもとに導くためでした。
(1ペテロ 3・18)

ここで娘のことをお話ししますと、娘は小学生の時に近くの教会に導かれ、その後、聖書を中心とした教育を行う自由学園に8年間通いました。でも、聖書の知識は与えられたものの、生きておられる主イエス様に出会ってはいませんでした。いつも自分が正しいと考え、聖書のことも自分の方が知っている、という高慢な態度で、母娘の関係が逆転して見えた時もあります。しかし、聖書は「**子どもたちよ。すべてのことについて、両親に従いなさい。**」(**コロサイ 3・20**)と言っています。妻は、このみことばの土台に立ち、はっきりした態度で対応するようになりました。その時初めて、娘は、それまですべてが自分の思い通りになっていたことを知らされたようです。自分を省みるようになった娘は、まもなく生きておられる主イエス様に出会い、自分の罪深さを知ることができたそうです。それまでの態度を悔い改め、親に従うことがどれほど祝福であるかということを体験できた、と話してくれました。

こうして私たち家族は、全員が主の救いにあずかり、一つになることができました。本当の家族とされた喜びに満たされました。

私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。
(ピリピ 2・2)

主イエス様は、仕事のことでも働いてくださいました。イエス様を知った後も、仕事のことになると自分の力に頼っていた私に、ある時、ベック夫人のミンヘンさんが「あなたは、これからは違う力で仕事をすることができるはずです」と言われたのです。私はハッとしました。その一言で、仕事も主から与えられたものであり主の御手の中にある、ということに気づかされました。主は「**あなたがたにとってむずかしすぎる事は、私のところに持って来なさい。**」(**申命記 1・17**)と言われています。私は、「自分では何もできません、どうしたらいいでしょうか、よろしくお願いします」と主に祈り、おゆだねしました。主が、ミンヘンさんの口を通して語ってくださったことで、方向転換することができました。それによって、主の御力をたくさん見せていただきました。

この6月で43年間のサラリーマン生活を終えましたが、救いにあずかってからの12年間は、新しい人生の歩みであったと実感しています。価値観が一変して、大切に思っていたことから解放され、らくになりました。

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。
(2コリント 5・17)

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。
(ガラテヤ 2・20)

私の意志、考え、感情、自我はイエス様とともに十字架につけられました。イエス様は私の古い人といっしょに十字架で死んでくださいました。そして、よみがえりのいのちで、主ご自身が新しくされた私の内に生きて働いてくださっています。イエス様のものとされた私は、この世にあって、「**この世のものでない**」(**ヨハネ 17・14**)のです。

あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。
(1コリント 6・19、20)

御霊によって新しく生まれ変わった私は、栄光の主とともに歩みたい、と望んでいます。すべてを主におゆだねし、主のしもべとして歩んで行きたい、と願っています。あいかわらず悔い改めることの多い日々ですが、朝ごとに新たな気持ちで祈ることができるのも感謝です。そして、そのような者に、主は、すばらしいみことばを与えてくださっています。

神はキリストにおいて、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。
(エペソ 1・3)

すべての霊的祝福をもって祝福してくださるとは、なんという、うれしい約束でしょうか。喜ばずにいられないみことばです。「**いつも喜んでいなさい。**」(**1テサロニケ 5・16**)と主が言われるのは当然だと思います。しかし、この当然のことが、なかなかできていない、と思わされます。毎日の生活で生じるいろいろな問題、悩みなどで、いつの間にか主を見失い、喜びが消えているときがあります。でも、どんな状況に置かれていても、私たちは主の愛の御手の中にあります。主はすべてをご存知であり、最善の計画を立てていてくださるお方です。そのことを忘れずに、主を信頼し、希望を持ち続けたい、と願っています。

主が与えてくださった、もう一つのうれしいみことばは、次のものです。

それどころか、からだの中で比較的に弱いと見られる器官が、かえってなくてはならないものなのです。また、私たちは、からだの中で比較的に尊くないとみなす器官を、ことさらに尊びます。こうして、私たちの見ばえのしない器官は、ことさらに良いかっこうになりますが、かっこうの良い器官にはその必要がありません。しかし神は、劣ったところをことさらに尊んで、からだをこのように調和させてくださったのです。それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いにいたわり合うためです。もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし一つの部分が尊ばれれば、すべての部分がともに喜ぶのです。あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとりは各器官なのです。（1コリント 12・22～27）

からだの部分で大切でない器官は一つもありません。世の中には地位の高い人、立派で偉いと言われている人、何でもできる人など、いろいろな方がいますが、私自身は見ばえのしない者であります。しかし、天地万物をお造りになり、私をも造られた主は、私のような者をも、なくてはならないイエス様のからだの一部である、と言ってくださっています。からだの中で比較的に弱いと見られる器官が、かえってなくてはならないものだ、とあります。読んで、喜びと希望がわいてくるみことばです。

いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。

（ピリピ 4・4）

父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。わたしの愛の中にとどまりなさい。もし、あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛にとどまるのです。それは、わたしがわたしの父の戒めを守って、わたしの父の愛の中にとどまっているのと同じです。わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたの喜びが満たされるためです。（ヨハネ 15・9～11）

まだイエス様をご存知ない方が、一日も早くイエス様を受け入れて、毎日の不安や心配から解放され、喜びに満たされますように心から願っております。

1941年北海道小樽市生まれ。花園小、東山中、潮陵高定時制、国学院大学政経学部第二部卒。ホクシー（株）、合併により王子ネピア（株）常務取締役、参与を経て2005年6月退職。妻 麗子さん、長女 弥生子さん。

心の貧しい者は幸いです

神田 啓子

それはあなたが私の内臓を造り、母の胎のうちで私を組み立てられたからです。私は感謝します。あなたは私に、奇しいことをなさって恐ろしいほどです。私のたましいは、それをよく知っています。私がひそかに造られ、地の深い所で仕組まれたとき、私の骨組みはあなたに隠れてはいませんでした。あなたの目は胎児の私を見られ、あなたの書物にすべてが、書きしるされました。私のために作られた日々が、しかも、その一日もないうちに。（詩篇 139・13～16）

私は島根県出雲市に、祖父母、両親、姉と妹の7人家族の中に生まれました。家庭生活はおおむね幸せなものだったと思います。しかし、学校に行くようになり、社会生活が始まると周囲の大人の正直でない言葉に大きな失望を味わいました。小学2、3年の頃、反抗的になりました。私はこの世に絶望し、「この世は生きるに値しない」と思っていました。しかし、その悩みを誰にも理解してもらうことができないでいました。そんなある日、母が私に言った一言で私の真っ暗な心の中に一条の光が差し込みました。その時、私は母のためだけに生きようと決心しました。

やみの中を歩んでいた民は、大きな光を見た。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が照った。

（イザヤ 9・2）

中学、高校の頃は、移ろい行く虚しいものでなく、永遠に変わらないものを母に贈りたいと願っていました。しかし、永遠に変わらないものを知らない私には実行不可能でした。大学1年で祖父が、大学4年で祖母が亡くなり、大学を卒業して医者になった最初の年に、母がクモ膜下出血で即死しました。私の人生の目的が崩壊してしまいました。その時、聖書の「**心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。**」（**マタイ 5・3**）という、みことばに出会いました。しかし、このみことばを語っていらっしゃるお方ご自身を知らなかった私は、このみことばと格闘してしまいました。私には心の貧しい者とは母のことと思えました。不幸な一生だった母がどうして幸せだったと言えるのだといきりたち、神の存在を否定し、自分の力でやろうとしました。それまで幼いときから、この宇宙を創造なさった創造主なる神は存在すると漠然と思っていました。この神様に対して意識的に背をむけ、自分の力を頼みとして歩みだしました。そして聖書にあるとおり、

滅びの道をまっしぐらに進んで行きました。主イエス様はこのように愚かな私を憐れんでくださり、御使いを送ってくださいました。母の死の翌々年、私はロサンゼルスの小児病院で麻酔科の研修医として働いていました。そこで8歳くらいの少年の麻酔をかけました。術前診察に行った時、この少年は両親と静かに祈っていました。術中死もありうるという危険な手術でした。麻酔導入前、彼はひとこと"Remember I loved you"（僕があなたを愛していたことを覚えていてね）と言い、後は静かにされるままになっていました。日本の同じ年頃の子供なら泣き叫ぶのが普通だったので感動しました。術後診察に行った時、口も利けないほど弱っていた彼は、私の右の手をとって黙って頬にあててくれました。その時私は、自分の手が穢れているような気がして思わず引っ込めたくなりました。

彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く小羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。（イザヤ 53・7）

これを見たシモン・ペテロは、イエスの足もとにひれ伏して、「主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから。」と言った。（ルカ 5・8）

しかし、頑なな私はそれでも自分の道を歩み続け、ついに40歳になって完全に自己破産した状態になり、「神様助けて！」と叫んでいました。

神よ。私を救ってください。水が、私ののどにまで、はいって来ましたから。私は深い泥沼に沈み、足がかりもありません。私は大水の底に陥り、奔流が私を押し流しています。（詩篇 69・1、2）

そして、主イエス様はみことばの約束のとおりに答えてくださいました。

わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。（エレミヤ 33・3）

友人の家でウォッチマン・ニーの本を読んで、聖書を一度もきちんと読んだことのないのに気づかされ、すぐに聖書を入手して読み始めました。

主は、王だ。（詩篇 97・1）

来たれ。私たちは伏し拝み、ひれ伏そう。私たちを造られた方、主の御前に、ひざまずこう。主は、私たちの神。私たちは、その牧場の民、その御手の羊である。きょう、もし御声を聞くなら、メリバでのときのように、荒野のマサでの日のように、あなたがたの心をかたくなにしてはならない。あのとき、あなたがたの先祖たちはすでにわたしのわざを見ておりながら、わたしを試み、わたしをためした。わたしは四十年の間、その世代の者たちを忌みきらい、そして言った。「彼らは、心の迷っている民だ。彼らは、わたしの道を知ってはいない。」と。（詩篇 95・6～10）



2005年ドイツよろこびの集いで。前列右端、神田さん

この聖書で主と言われているお方を礼拝しました。それからは毎日が聖書のみことばを食べる日々となりました。受洗した日に与えられたみことばは「**わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。**」（ヨハネ 14・6）でした。その時、私はこれまでずっと求め続けていた永遠に変らない真理とはイエス様であったことを知りました。救われて10ヵ月後に、吉祥寺キリスト集会に導かれました。集会に集うようになってまもなく、ある夜聖書のヨブ記を読んでいると、それまで何度か読んでいたのに、その時初めてヨブ記全体が私の心を照らす鏡となりました。

ヨブはかつてこう言った。「私は正しい。神が私の正義を取り去った。私は自分の正義に反して、まやかしを言えようか。私はそむきの罪を犯していないが、私の矢傷は直らない。」（ヨブ 34・5、6）

私は神様の前に自分の傲慢な愚かさを見て、恥ずかしさと驚きと恐れからどうしていいかわからなくなりました。しかし、どうすべきかヨブ記の終わりの方に書いてありました。そしてそのとおりにしました。

私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。（ヨブ 42・5、6）

救われて15年がたち、私は今年でちょうど亡くなった母の歳になります。「**心の貧しいものは幸いです。天の御国はその人のものだからです。**」とは主が母にくださった墓碑銘だったと思っています。それは、私に慰めと希望を与えようとしてくださった主のご愛に他ならないことが、救われた後にわかりました。

あなたのあわれみは大きい。主よ。あなたが決めておられるように、私を生かしてください。（詩篇 119・156）

ひとりでも多くの方が神のみことばである聖書を通して、主イエス様ご自身に出会われますように。

1950年島根県生まれ。神門小、河南中、出雲高、山口大医学部卒。阪大大学院医学研究科博士課程終了。茅ヶ崎新北陵病院勤務。

主の御栄えはとこしえに

上野 エリ子

2004年は私にとって生涯忘れられない年となりました。主イエス様に出会えたからです。思えば数年前、人生に何の喜びも希望もなく、出口の見えない真っ暗なトンネルの中を途方に暮れて歩いているようで、生きていてもまるで死んだような状態でした。そのころ、職場の同僚が実に根気よくキリスト集会の本『光よあれ』や、福音メッセージの録音テープなどを手渡してくれました。私は特に断る理由もなく、さりとて熱心に求めるわけでもなく、何か心の遠い所で受け取っていたように思います。聖書の素養も下地も何もなかったのですが、主の一方的な憐れみによって救われ、2005年6月に初めて参加したドイツキャンプでは、アイドリンゲンの会堂で「イエス様を証しする」恵みにあずかりました。その初めてのつたない証しをここに書き記します。

「このたびは、はるばるドイツまで来られるとは思ってもいず、主イエス様のお導きにただひれ伏すばかりです。神様から最も遠い所を歩いてきた私のような者も主は憐れんで導いてくださり、感激しています。その陰に、敬愛するキリスト集会の方々やドイツの皆様のお祈りがありましたことを、心より感謝申し上げます。救われたばかりの信仰の幼い者ですが、証しさせていただきます。

私は3歳のとき父を脳腫瘍で亡くし、その後、小学生の時に義父にいじめを受けて、母にはもちろん誰にも打ち明けられずひとりで苦しみ、心を閉ざすようになりました。また結婚後、同業の夫の重いアルコール依存症に悩まされ、絶望的な日々を送っていました。不和な家庭生活の中で涙とともに床に伏し、その涙も乾ききらぬままに朝を迎え、身支度をして戦場に向かう兵士のように、使命を果たすべく職場に出かけたその苦しい日々の何と長かったことでしょう。解決の糸口も見つからず、歯をくいしばってひたすら我慢し、自分にむち打つように耐え忍びました。長男が大学生の時、とうとう行き詰まって倒れ、救急車で入院しました。その後は、まるで抜け殻のようになって茫然とした日々を送っていました。そんな中で今から思えば主の備えでしょうか、集会の女性が勤めている今の職場を与えられ、集会の本やテープをもらって少しずつ聖書のことを知り、家庭集会にも集うようになりました。しかし、どうしても罪の問題がわからず進んで行けませんでした。ところが、昨年の12月9日、武蔵野市中町の家庭集会の帰り道、突然イエス様を信じることができたのです。

ああ、私の苦しんだ苦しみは平安のためでした。あなたは、滅びの穴から、私のたましいを引き戻されました。

(イザヤ 38・17)

キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。

(ピリピ 3・21)

そうか、私の卑しいからだを、主はご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのだ、と思い知らされた瞬間、何十年と引きずっていたトラウマ(心の外傷)から解放されました。そして、もやがかかっていたような世界が、急に霧が引いたように晴れわたりました。また絶対に許せないと憎んでいたあの人この人を自然と許すことができたのです。すると、今まですっかり忘れていた自分の犯した罪が、まるで映像にうつし出されるように、ガーッと心に迫ってきました。私は一晩中まんじりともせず、それらの罪を次々と思い知らされ身震いしました。私は自分が傷つけられたことを盾にとって、実は自分の犯した罪に気づくことさえなかったのです。これほど罪深いことはないのではないでしょうか。しかし、その映像の最後に、私の罪の贖いのために流されたイエス様の血の赤さまで見えたような気がしました。ああ、救われるということは、こういうことだったのかと思ったことでした。翌日、私を導いてくださった職場の友人に救いの確信が得られたことを証しし、その6日後には職場の片隅で、ささやかな二人だけの祈り会を始めることができました。そして今年の4月には受洗の恵みにあずかりました。



2005年ドイツよろこびの集いに参加した折に。右、上野さん

心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです。

(マタイ 5・3、4)

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているの

主のあわれみは尽きない

杉本 文雄

駐在地から帰国したばかりの1996年3月、任地での知人の葬儀が吉祥寺キリスト集会所で行われました。式場には亡くなった彼女の写真が飾られていましたが、その写真を見てそれまでの価値観が変わるほど驚きました。「これがもうすぐ死ぬことがわかっている人の顔なのか」と。それは喜びにあふれた笑顔でした。

私はごく平凡な中年サラリーマンです。総合商社に勤めていますので、二度の海外駐在を経験したことが多少ユニークな経験かもしれません。小さい頃からやんちゃでスポーツ好きで、高校・大学・就職・結婚と自分の好きなようにしてきました。スポーツでは挫折も経験しましたが、自分の限界まで挑戦したという自負によって満足していました。しかし、二度目の海外駐在では仕事がうまく行かず、そのためもあって他の駐在員や上司との人間関係もギクシャクしていました。5年の予定のところを4年で帰国しましたが、それは商社マンとして不合格のレッテルを貼られたことでもありました。

その後、夏の御代田よろこびの集いでイエス様を信じる者となりました。それまで自分で気付かずに負っていた重荷を下ろすことができ、平安に満たされて、すなおに喜びました。私のような者にもイエス様は救いの御手を差し伸べてくださったのです。主のあわれみとしか考えられません。

しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。――　（エペソ 2・4、5）

しかし、そのときには、自分が罪過の中に死んだものであることが、全くわかっていませんでした。自分は罪人であること、イエス様が十字架にかかって私の罪を帳

ではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

（ガラテヤ 2・20）

これからも信仰の上で試練や戦いがあると思いますが、主イエス様だけを見上げ、自分のすべてをお委ねして歩んでいきたいと思います。家族をはじめ一人でも多くの方に福音が伝わりますよう、また病に絶望している人々に永遠の命の喜びを少しでも伝えられる、主イエス様のよき管として用いられますように祈り続けたいと思います。

主は私を、すべての悪のわざから助け出し、天の御国に救い入れてくださいます。主に、御栄えがとこしえにありますように。アーメン。　（2テモテ 4・18）

ドイツキャンプでは毎日がとても忙しく、まるで駆け足で過ごしたようでしたが、帰国前日の早朝、腹痛で苦しんでいた女性の同室の方に呼ばれ訪室した際、不思議と落ち着いて心静まることができました。その女性は大病されたという既往歴や痛みと不安の中で苦しんでいましたが、その心持ちもよくわかり、自分の耳を直接お腹にあてて聴診し、彼女のぬくもりをじかに感じながら、これは大丈夫と思わされました。主イエス様がご臨在されたのだと覚えました。のちに彼女から、私を通してイエス様が働いてくださっていると感じた、というお手紙をいただきました。主は私のように罪深く小さな者をも用いられて彼女を守ってくださったのですから、二人で心をあわせて主のご栄光を拝した、と今私は思うのです。日本に帰ってきて、何か心持ちが軽く、主にある兄弟姉妹の中で証ししたことによって、心の中のわだかまりが取れ、重荷から解放されたことがわかりました。そして、ドイツで撮っていただいた写真を見て、涙が出そうになりました。かつての私はそのように笑顔でいられる者ではなかったのです。

私は、自分はすでに捕えたなどと考えてはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。

（ピリピ 3・13、14）

今の職場には私を含め三人の信仰の友が与えられています。ご再臨が近い今、私たちのなすべきことは何か、絶えず主に祈り求めながら歩んで行きたいと願っています。みこころだけがなりますように、アーメン。

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。

（詩篇 37・5）

愛知県生まれ。旭丘高校、信州大学医学部卒業。茅ヶ崎新北陵病院勤務。神経内科専門医。

消しにしてくださったこと、さらには3日後に甦って新しいいのちを与えてくださったこと、これらのことは聖書を通して、また信仰を共にする集会の方々を通して少しずつ教えられました。これも主のあわれみです。

しかし、3人の子供に恵まれた家庭を持ち、健康で仕事があり、住む家があり、この世の観点から見れば満たされた生活を過ごしているうちに、いつの間にか、救われた喜びも自分が罪人であることも忘れてしまっていました。

この民は口先で近づき、くちびるでわたしをあがめるが、その心はわたしから遠く離れている。彼らがわたしを恐れるのは、人間の命令を教え込まれてのことにすぎない。それゆえ、見よ、わたしはこの民に再び不思議なこと、驚き怪しむべきことをする。この民の知恵ある者の知恵は滅び、悟りある者の悟りは隠される。（イザヤ 29・13、14）

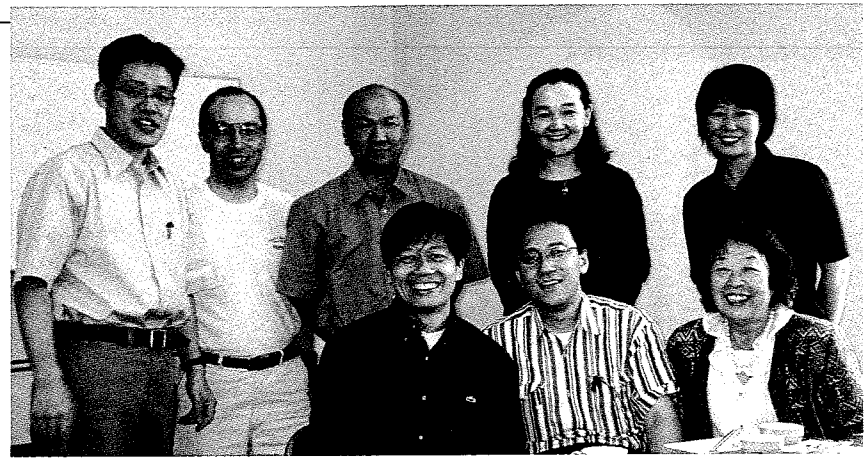
4年前、高校生だった長女がイエス様への信仰を失い、親に従わなくなりました。私は悩み苦しみました。イエス様のもとに帰ってくるように、秩序のある生活をするようにと、思いを尽くして何度も娘に話をしました。私は10の約束を娘に示し、それが守れないなら家を出なさい、と言いました。しかし、経済的にも精神的にも自立などとてもおぼつかない若い娘です。家から出したらどうなるか、と苦しみました。でも、これは人のはかりごとであり、問題の解決にはなりませんでした。娘に無理やり約束をさせ、娘は約束を守らず、イエス様に立ち返る気配も見せませんでした。

主は国々のはかりごとを無効にし、国々の民の計画をむなしくされる。主のはかりごとはとこしえに立ち、御心の計画は代々に至る。　（詩篇 33・10、11）

王は軍勢の多いことによっては救われない。勇者は力の強いことによっては救い出されない。軍馬も勝利の頼みにはならない。その大きな力も救いにならない。　（詩篇 33・16、17）

私は自分の力で問題の解決をはかろうとして、イエス様に頼っていなかったのです。また私の思いは、大学は卒業して欲しい、ちゃんとした職業について欲しい、家族で団欒できる生活を取り戻したい、家族みんなで御代田のよろこびの集いに参加したい、というようなことでした。すべて人間的な思いでした。イエス様にとって、娘をご自身に立ち返らせることなど簡単なことでしょう。しかし、イエス様は娘のことだけでなく、自分の力に頼っていた私のことも考えていてくださり、働かれる時を待っておられたのです。

人の言葉のむなしさ、自分の無力さを思い知らされた私は、主に頼らざるを得なくなりました。それまでも祈ってはいましたが、すべてを心から主に委ねるように祈ったのは、このときが初めてでした。こうして私という邪魔者が退いた時、イエス様は直接娘に語りかけられ、娘の悩みが私たちに明らかにされました。



キリスト集会の方々と。前列左、文雄さん、後列右端、妻 淳子さん

3月のバンクーバーのよろこびの集いに参加した娘は、同じような悩みを持つ若い方々と出会い、共に過ごすことができました。これも主の導きだったと思います。そして、直後に起こされたある事を通して再びイエス様を信じる者になりました。

主に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださるから。（イザヤ 55・7）

娘のことで私は、聖書の中のヨブのように、主の前に悔い改めずにいられませんでした。イエス様に頼らなかったこと、主をないがしろにして自分をイエス様の上に置いたこと、主のご栄光よりこの世のことを思っていたこと——その愚かさと誤りを痛感させられました。

あなたには、すべてができること、あなたは、どんな計画も成し遂げられることを、私は知りました。知識もなくて、摂理をおおい隠した者は、だれでしょう。まことに、私は、自分で悟りえないことを告げました。自分でも知りえない不思議を。どうか聞いてください。私が申し上げます。私はあなたにお尋ねします。私にお示しください。私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。　（ヨブ 42・2〜6）

愚かな私たちを日々、導いてくださっている主を仰ぎつつ、天の御国への希望を携えて歩んで行きたいと願っています。

1956年大阪府生まれ。八尾市立竜華小、竜華中、府立八尾高校、神戸大学経営学部卒。住友商事（株）勤務。家族は妻 淳子さん、長女 真里絵さん、長男 雄平さん、次男 淳平さん。

主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう。(ルカ 1・45)

杉本 淳子

子供の時、戦争や自然破壊、食糧危機などのニュースに恐れとまどっていた私に、父は「すべては人間の英知が解決する」と言いました。この言葉は、私の恐怖や不安を取り除く大きな助けとなりました。「賢くなれば幸せになれる」と自己実現をめざし、「世界中の知恵を集めれば人間は幸福になれる」と単純に考えて、私は大人になりました。一方、自分が傷つくことには耐えられず、困難な事に遭遇すると父に助けを求め、父の所に逃げ込んでいました。結婚してからは、避難場所は主人となりました。

南アフリカに駐在していた13年前、結婚、子供、豊かな暮らしなど、目に見える幸せを手にしたと思っていましたが、心の中に「この幸せは永遠に続くのか」「手にしているものの一つでも失えば、すぐに幸せは消えてしまうだろう」という不安がわいてきました。

そんな頃、両親が現地で生まれた子どもに会うために南アフリカまで来てくれました。2年ぶりに会った父は、別人のようになっていました。背が高くがっしりとした体格の父でしたが、空港の到着ゲートから出てきた父はすっかりやせて、よぼよぼのお爺さんでした。すでに病気に侵されていた父は、「死んだらどうなるのか？ 死後の世界が本当にあるのだろうか？」と不安を口にしました。かつて「すべての問題は人間の英知が解決する」と言ってくれた、たくましい父がすっかり弱くなっていたのです。

頼るべき存在が、小さく弱くなってしまったことに私は失望し、動揺しました。愛のかけらもない、自分のことしか考えない者でしたので、父の気持ちを思いやるどころか、弱気になっている父を腹立たしくさえ思いました。父は1年後に亡くなりました。

父の死後、吉祥寺キリスト集会のある方の葬儀のテープを聞き、今までの価値



ドイツよろこびの集いで。
淳子さんと夫 文雄さん

観が完全にひっくり返り、「このような信仰があったのか」とカルチャーショックを受けました。天国が本当にあるのなら、私も天国を楽しみに生きてみたい、と真剣に聖書を読み始めました。そして次の聖書のみことばに出会いました。

陶器師を粘土と同じにみなしてよかろうか。造られた者が、それを造った者に、「彼は私を造らなかった。」と言い、陶器が陶器師に、「彼はわからずやだ。」と言えようか。　(イザヤ 29・16)

「わたしは光を造り出し、やみを創造し、平和をつくり、わざわいを創造する。わたしは主、これらすべてを造る者。」ああ。陶器が陶器を作る者に抗議するように自分を造った者に抗議する者。粘土は、形造る者に、「何を作るのか。」とか、「あなたの作った物には、手がついていない。」などと言うであろうか。　(イザヤ 45・7、9)

今まで、神様に造られた者であるにもかかわらず、そのことをまったく意識せず自分中心に生きていたこと、それが罪であることを知りました。造り主である神様を知り、イエス様に愛されていること、イエス様の十字架の死によって私の罪が赦されていることを知りました。

その後、帰国しましたが、不思議な方法で吉祥寺に住まいが与えられ、キリスト集会に集うようになりました。集会では、病気や家族の問題などさまざまな悩み、苦しみを抱えながらも、イエス様のいのちに満たされ、喜び、平安に生きている多くの方々にお目にかかりました。

イエス様を知らないまま死んだ父のことが気になっていましたが、ベックさんに「死の直前でも、ごめんなさい、ありがとう、これからもよろしく、この三つをイエス様に言えれば、天国に行けるんだよ」と教えていただき、うれしくなりました。

以前は、思いどおりにならない事すべてを、自分を取り巻く人や環境のせいにし

て不平不満の中で生きていましたが、そんなわがままのためにイエス様は死んでくださいました。本当に理解を超えた深い愛であり、感謝せずにいられません。そして、みことばの真理を信じることができ、心から「幸せです」と言えるようになったことも大きな恵みです。その真理とは、すべての事が天地万物をお造りになった方によって支配されていること、そのお方は、すべての人が救われて永遠のいのちを持つようにと望んでおられること、最善の道を備えてくださる方でもあること、相変わらず神様を悲しませる者であってもイエス様の十字架の贖いで赦されていること、今はわからなくても後でわかるようになること、イエス様のおっしゃることは必ず実現することなど——です。

目に見えるものはいつ取り去られるかわかりません。今日良いと言われている事柄が明日も同じように価値あるものとは限らないということは、三人の子供たちを育てていく日々の生活で実感しています。良かれと思って子供に与えたものや助言が、的外れであったという経験は、今でも繰り返しています。しかし聖書はどう言っているのか？イエス様のみこころは何なのか？という一点に目を留めて主に立ち返ることができます。

日常生活の中では、世の中のさまざまな情報に惑わされ、あれこれと思い悩み、目に見えるものに頼ろうとしてしまいます。しかし、イエス様を信じるようになってからは、「子供たちのことをすべてお委ねいたします」と主人と二人で祈れるようになりました。ご自分を卑しくして十字架にかかって死んでくださるほど私を愛し、子供たちを愛してくださったイエス様。そのイエス様を子供たち自身が心から愛し、従う人生を送ってほしいと毎日祈っています。

イスラエルよ。今、あなたの神、主が、あなたに求めておられることは何か。それは、ただ、あなたの神、主を恐れ、主のすべての道に歩み、主を愛し、心を尽くし、精神を尽くしてあなたの神、主に仕え、あなたのしあわせのために、私が、きょう、あなたに命じる主の命令と主のおきてとを守ることである。

（申命記　10・12、13）

それをあなたがたの子どもたちに教えなさい。あなたが家にすわっているときも、道を歩くときも、寝るときも、起きるときも、それを唱えるように。

（申命記　11・19）

私自身、主のご命令を何一つ実行できない弱い者ですが、イエス様から目を離さないで主のお約束を握りしめ、主の道を歩ませていただきたいと心から願っています。

1957年京都府生まれ。中野昭和小、帝塚山学院中、帝塚山学院高、甲南女子大学文学部卒。家族は夫 文雄さん、長女 真里絵さん、長男 雄平さん、次男 淳平さん、母 三宅 福子さん。

主の愛と赦しの中に生かされて

山口 一郎

私は太平洋戦争終結の年の昭和20年11月、母の疎開先の広島県福山市郊外に生まれました。私の人生を振り返ってみますと、自分は、実に説明のつかない、目には見えない不思議な力でいつも導かれてきたのだ、と思えてなりません。

私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです。（使徒　17・28）

まず、原子爆弾が投下された広島県に生まれたことです。もし母がもう3ヵ月早く、そしてもう少し爆心地近くに住んでいたなら、母は被爆し、私はこの世を見ることがなかったでしょう。

次に、私がサラリーマン時代に勤務地のアラスカで大きな自動車事故と飛行機事故に遭い、それでも怪我で済み、全員の命が奇跡的に助かったことです。

三番目は、平成6年に亡くなった母が八王子の病院に入院していたとき、妻と見舞いに行き、母の耳元で聖歌を歌っていたご婦人と知り合い、その方を通してキリスト集会に導かれるようになったことです。

四番目は、勤務していた鹿嶋の私立高校で一人の女性教員と出会ったことです。この女性は二十数年前の学生時代に吉祥寺キリスト集会に集っていて、一時、集会を離れていた方でした。出会ったときは結婚のことで悩んでおられましたが、この出会いを通して集会に再び集うようになり、そして鹿嶋の私の自宅が主に用いられる場所となりました。さらに彼女が20年来祈り続けてきた結婚の夢が昨年かなえられたのです。

五番目は、私たちの思いをはるかに超えた方法で、私の両親がイエス様によって救われ、天国に入ることを許されたことです。父の救いには、キリスト集会の女性との出会いが不可欠でした。父はすべてに厳格で頑固一徹、しかも16代続いた神道の家系でしたから、イエス様を受け入れることは到底無理だと思っていました。

しかし、哀れみ深い主は、父に一番ふさわしい助け人を送ってくださいました。その女性の舅（しゅうと）は、私の祖父が岐阜県の製糸工場を経営していたときの社員だったのです。父は日ごろからその人を尊敬していましたので、その事実がわかると驚愕し、嫁である女性の熱心な誘いに次第に心を開き、亡くなる2年前に家庭福音集会へ導かれました。そして、病床で聖書を2回も通読したのです。

これらの事実――さ迷っていた私たち家族を救おうという神様のご計画と哀れみが、絶えず私たちの上に注がれていたという事実に、感謝せずにはいられません。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。　（エレミヤ　29・11）

しかし、以前の私はイエス様から遠く離れていた者でした。子どものころは父にほめられたことがなく、怖い父に反発することもできず、いつも何かに脅えて生きてきました。すべてに劣等感を持つようになりましたが、他方で妙なプライドも持っていました。いま思うと、このような屈折した心を持ったまま大人になったような気がします。

仕事面でも曲折があり、12年の海外勤務から国内勤務に変った頃は、仕事に喜びを見出せず悩みました。心の中で焦りが出て、酒に酔い、妻や子に当り散らす醜態をさらすこともありました。次男は小学校でいじめを受けていました。

そのような時期に妻に乳がんが見つかりました。そして、妻の手術後お見舞いに来てくださった若い牧師夫妻の導きで、妻や次男と教会の日曜礼拝に出るようになりました。でも、そのころの私はまだ、1週間の心の汚れを聖めてもらうという、ご利益的な気持ちで礼拝に出ていましたので、イエス様を体験的に知ることはありませんでした。

一方、妻も、教会に喜びを見出すことができなくなっていたようです。そして、先に述べましたように、母の入院先で出会った婦人を通してキリスト集会に集い始めました。集会から帰った妻の顔は喜びで満ちあふれていました。その大きな変化に気づいた私は、その集会所がどういうところなのか知りたくなりました。また、夫と妻が別の場所で礼拝するのはおかしいと思いましたので、恐る恐る吉祥寺集会の礼拝に参加してみました。

吉祥寺の集会所は大勢の信者で埋め尽くされ、特に男性の数が多いのに驚きました。一人ひとりの顔が喜びにあふれ、神の平安と愛に満たされた雰囲気に、別世界を見ているように思いました。併せて、ここには本物の信仰があると感じました。

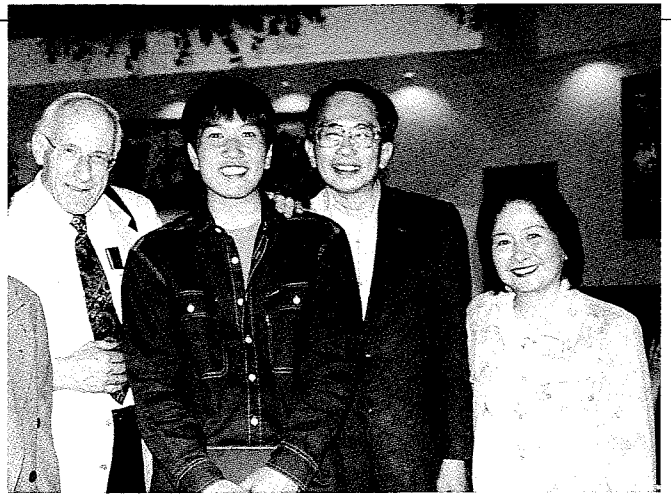
こうして吉祥寺集会に集うようになった私は、祈りと賛美、家庭集会への参加、多くの方々との語り合いを通して、少しずつ頑固な心の目を開いていただいたように思います。自分の罪を強く感じるようになり、平成7年秋のある朝のことですが、多摩川の土手に車を停め、一人車内で「ああ、イエス様、哀れんでください。この者をお助けください。私のわがままを赦してください」と初めて真剣に祈りました。そして、ある日、なにげなく開いた聖書で次のみことばを目にしたとき、私は自分の犯してきた多くの罪がすでに赦されていることを示されたのです。

わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。　（イザヤ　43・4）

わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。　（イザヤ　43・25）

イエス様だけが真の神であり、唯一の心の支えであり、自分のよき理解者であると受け入れたとき、罪のないイエス様が私の身代わりとなって、滅びに向かうみじめな私の魂を救ってくださったのだと、涙をもって心から感謝せずにいられませんでした。そして、これは本当に奇蹟に近いものでしたが、父が天に召される前に、私と父は和解することができました。互いに心から許し合うことができました。もう口もきけなくなっていた父は、妻と私の手を自分の両手でしっかりと握りしめました。それが父との最後の別れとなりました。

万能のイエス様に、愛そのものであるイエス様に、裏切ることを知らないイエス様に、どこまでも、いつまでも従って歩んで行きたいと、心から願っています。



御代田の国際福音センターで、左から、ベックさん、次男 泰史さん、一郎さん、妻 寿子さん

1945年広島県生まれ。萩浦小、東調布中、都立大森高、上智大学外国語学部スペイン語学科卒。宝幸水産（株）、（株）日本ペプシコーラ・ボトラーズ勤務を経て、現在、わせだ学園高等学校水戸学習センターに勤務。妻 寿子さん、長男 昌俊さん、次男 泰史さん。

私の思いを はるかに 超えた主の愛

山口 寿子

私は今から16年前、40歳の時、乳がんの手術を受けました。初めて味わう死の恐怖と再発の不安で眠れない日が続いていた頃、一人のクリスチャンの友人を通して救い主イエス様に出会いました。友人の祈りに合わせているうちに、涙がとめどもなくあふれてきました。祈りの後、目を開けると、あたりが光り輝いていました。今までに味わったことのない平安を感じました。その夜から安心して眠れるようにもなりました。

「わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことがありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」 **(ヨハネ 4・14)**

このイエス様のみことば、永遠の命の約束によって、私は生ける希望を持つことができたのです。退院した私は友人の教会に通うようになりました。この友人と、友人のご主人となられた牧師さんには大変お世話になり、今でも感謝しています。その牧師宅の書棚に『実を結ぶ命』という本を見つけて、読ませていただいたこともあります。20歳でがんに冒されながら、イエス様のために実を結びたいと願った少女の純粋な信仰の証しが記された本でした。私はこの本に深く感動しましたが、そのときは、本を出版した吉祥寺キリスト集会に集うようになるとは、夢にも思いませんでした。

こうして初めのうち、教会は心のよりどころとなっていたのですが、しばらく通っているうちに、喜びがなくなっていきました。いま思うと恥ずかしい限りですけれども、夫の失業に「教会で祈っているのに、なぜこんなことが…」とつぶやいたり、教会内の人間関係に悩まされたり、息子の不登校の悩みを打ち明けて「教会では話さないように」と言われたり——。私の信仰にも問題はあったのですが、心の空しさ、寂しさから抜け出す道を見出せなくなっていました。

そのような状況の中で11年前、姑(しゅうとめ)が入院していた病室で一人の婦人と出会い、吉祥寺キリスト集会に導かれて、ベックさんとお話をする機会も与えられました。ベックさんは私の愚痴を辛抱強く聞いてくださり、舅(しゅうと)を愛せないでいた悩みをお話しすると、「お年寄りは寂しいんだよ」と言われました。この一言に私はハッと気づかされ、頑なな思い込みに縛られていた心がほぐれていくような気がしました。そして、主人の両親にイエス様の愛を伝えたい、と心から祈るようになりました。姑は晩年、「死んだらどこに行くのかね」と病床でつぶやき、舅は「何のために生きて来たのだろうか」と叫びました。自分の力で懸命に働き、幸せを求めて歩んできた二人が孤独と空しさの中で叫んだ声を、主は聞いてくださいました。イエス様の一方的な愛によって救われ、姑は天の御国へ召されたのです。



2005年ドイツよろこびの集いに参加して。左から3人目、寿子さん、6人目、母 杉山澄子さん

1997年1月、私たちは長男を東京に残し、舅と一緒に茨城県鹿嶋市に転居しました。いろいろな問題や悩みを抱えたままでしたが、主は一つ一つ私たちの祈りに答えてくださり、状況は徐々に整えられていきました。近くに住んでいる妹夫婦も協力してくれました。まもなく我が家は日曜礼拝の場として用いられ、ベックさんが来られて家庭集会も開かれるようになりました。この8年間、主はたくさんの新しい魂を導かれ、救いの御業を見せてくださいました。同時に、家族の秩序の回復のために、訓練をも与えてくださいました。それは次男の不登校です。どんどん内にこもっていく次男に、私たち夫婦は心を痛めながら何もしてやることができませんでした。ところが、ある日突然、「お父さん, 僕を集会に連れて行って」と言い出したのです。閉ざされていた心は徐々に開かれ、「本当に僕はわがままだった」と悔い改めて学校に行けるようになりました。このことを通して主人と私は、心を一つにして主に拠り頼み、祈ることを教えられました。そして主は、私の悩みにも光を当ててくださり、主人との関係を修復してくださいました。それまでの私は主人の心の傷に気づかず、あるがままの主人を受け入れられずに、長い間、一人苦しんできました。

あなたはいったいだれなので、他人のしもべをさばくのですか。しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です。このしもべは立つのです。なぜなら、主には、彼を立たせることができるからです。 **(ローマ 14・4)**

このみことばが同じ日に二回、心に迫

りました。自分を正しいとして主人の弱さに添えず、一方的に愛されることばかり望んでいた私の罪が、はっきり示されました。主人ばかりを責めていた私を見て、主はどんなに悲しまれたことでしょう。こんな罪深い私のために、イエス様は尊い犠牲の血を流してくださったのです。自分の罪に、あらためて目を開かれた瞬間でした。イエス様によって、私の人生は悲しみから喜びに、絶望から希望へと変えられていきました。3年前、再び与えられた乳がんも、主の御手から受け取ることができ、生きて働かれるみことばの力を体験し、守られました。多くの祈りに支えられ、家族の心が一つにされたことは、何にも替えがたい喜びでした。日々の生活の中で思いわずらいが増すとき、主を見上げてみことばに頼ると、弱い私も主の力に支えられます。ここまで導いてくださった主イエス様に心から感謝と賛美を捧げます。

昨年6月18日、20年近くパーキンソン病を患っていた私の父が天に召され、集会で葬儀と納骨式をしていただき、多くの方にイエス様を紹介することができました。長い間寝たきりでしたが、みことばと賛美と祈りに触れるたびに、顔が輝き、祈りの後に「アーメン」と言う父でした。主イエス様が父の中にご臨在してくださり、父の魂が御国を仰いで安らいでいることを確信できました。長年の父の介護で疲れていた母も、次のみことばの呼びかけを受け入れて、主の救いにあずかりました。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。
（マタイ 11・28）

父の召天を通して天国の確信をいただき，今は父との再会を楽しみに待ちながら日々喜んでいる母を見て、イエス様の愛に感謝するばかりです。

今年5月、私は80歳の母と一緒に初めて「ドイツよろこびの集い」に参加しました。神様の創造された美しい自然の中で、ドイツの方々を含めて多くの人たちと心を一つにして主を賛美し、聖書のメッセージに耳を傾け、互いに語り合う時を持つ、それは文字通り「よろこび」の日々であり、天国を垣間見るような思いがしました。

主イエス様が再び来られる日を、今日か明日かと待ち望みながら、主の平安のうちに生かされている幸せを、心から感謝します。

私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。（1ペテロ 1・3）

1948年茨城県生まれ。常磐小、水戸一中、茨城キリスト教学園高校、同短大英語科卒。夫 一郎さん、長男 昌俊さん、次男 泰史さん。

主に明け渡してから

福留 伸子

わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。（マタイ 11・29、30）

「何のこだわりもなく、空の雲の上を進むような世界があるんだって。そういうの欲しくない？」これは以前、仕事のことで悩んでいるとき、御代田の福音センターでたまたま隣席にいた女性が問いかけてきた言葉です。私は、そんなものが本当にあるなら欲しいと思い、即座に「うん、欲しい」と答えました。これが、その先、どんなにささいで私的な事柄でも主に祈り、明け渡そうとするきっかけになりました。

イエス様は**「重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい」**という招きのみことばに続けて**「わたしのくびきを負って、わたしから学びなさい」**と言っておられます。そして、イエス様に自分自身を明け渡して、イエス様のくびきを負い、たづなを取っていただけるようになってからは、みことばどおり、「たましいに安らぎが来」て荷が軽くなりました。

私は約20年前、ある教会を出て、吉祥寺キリスト集会に導かれました。

受洗したのは大学時代、九州旅行の途中に祖母に誘われ伝道集会に参加したときです。その最後の日に、ある婦人に勧められて洗礼を受けました。その婦人が「何もわからなくていいのです。ただ、白旗を揚げればいいのです。そうすればあちら（神様）から、あなたを見つけていろいろなことを教えてくださるのですよ」と言ったので、「向こうが見つけてくれるなら、こんな楽なことはない」と虫のいいことを考えて洗礼を受けてしまいました。牧師と一緒に腰まで水につかって、「もし、この世に神さまがおられるなら私に信じさせてください」と心の中で祈りました。そして、この半信

半疑だった祈りに、神様は答えてくださいました。その後6年かけて、私の自我、自信、誇り、意地といったものを砕いてくださり、ご自分のもとに引き寄せてくださったのです。**「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、･･･任命したのです。」(ヨハネ 15･16)**というみことばが心に響きました。

少し時代をさかのぼりますが、私は物事を考え始めた頃から、「人は何のために生きているのだろう」という問いが頭から離れませんでした。真理を求め、本も読みました。大人に問いかけてもみました。しかし、結局は虚無主義に陥り、青年時代は親の心配をよそに、ウーマンリブ運動や、水俣病患者支援などに明け暮れていました。信じられるのは、今の自分の感性だけでした。

大学卒業後、就職をせず水俣市に移り住みました。しかし、水俣病の発生原因となった企業やそれを放置した社会の責任を追及しても、若い患者たちの「愛されたい」という切ない心を満たすものは何も得られないのです。私の虚無感はつのりました。そして、自分自身にも、尊敬していた人物にも失望して、運動が収束すると同時に、行く先が全くわからなくなり、疲れきった心と体をひきずるようにして、受洗した教会へと導かれて行きました。

教会では、神様は生きておられる、今まで真理の存在を否定して生きてきたのは完全に間違っていた、と知らされ、それからは毎日が感動と喜びの中にありました。けれども5年後、最愛の母が大腸ガンでこの世を去ったとき、あれほど熱心に祈ったのに、どうして神様は私の母を奪ってしまったのかと怒り、生まれてきたことを否定したいほどの絶望感にうちひしがれました。信仰を失ってしまったのです。そのことを、ある日、主は気づかせてくださいました。

信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神を求める者には報いてくださる方であることとを、信じなければならないのです。(ヘブル 11･6)

その後、もっと主を知りたい、本当のいのちを伝えられるようになりたいという願いが強くなりました。そして、ベックさんの「教会の健全な成長」というお話の録音テープを聞いたことがきっかけで、その教会を去ることになりました。

吉祥寺キリスト集会へ来てまず驚いたことは、自分の権威を押しつける人が誰もいなかったことです。敬われ、崇められるべきお方は人ではない、主イエス様おひとりだけ、という志が満ちていました。

私自身のことを言いますと、先にも触れましたように、母が召されてから3年間ずっと、神様に対する、恨み、不信感が心のどこかにひそんでいました。初めてイエス様を受け入れた頃のように、素直にみことばを信じ、祈ることができなくなっていました。**「初めの愛から離れてしまった。」(黙示 2･4)**というより、初めから、「人間が神を愛することができる」とは本気で考えていなかったのだと思います。聖書の中で、



横浜集会で。中央、福留さん

一番大切な命令として、**「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」(マルコ 12･30)**とイエス様がおっしゃっているにもかかわらずです。そんな私は、「自分の罪が赦されている」ということも、よくわかっていなかったのだと思います。聖書には**「あなたがたはみな、キリスト･イエスに対する信仰によって、神の子どもです。」(ガラテヤ 3･26)**とあります。罪が赦されているというのは、神の子とされたということです。でも、その頃は罪を感じたら自分を責め、もう二度とこんなことをしないためにはどうしたらいいかと、一生懸命に自分の内側を探っていました。主にゆだねきることが、まだできない状態でした。

私が癒され、主との交わりに確信を持てるようになったのは、父のことが大きかったと思います。12年前、悪性リンパ腫で召されましたが、父の最期の言葉は親指と人差し指で丸を作りながら言った「万事OK!」でした。父は若い頃から聖書不信の無神論者でしたが、主の憐れみは父の心に届き、病の中で主を受け入れ、祈ることができました。父は、死ぬことが怖くないと言って、本当に不思議な主のご臨在の中に置かれました。亡くなる数日前には、イエス様を見ているかのように「イエス、イエス」と言って手招きしました。また、お見舞いに来てくださったベックさんに笑顔で葬儀を依頼し、息をひきとる明け方には、付き添っていた姉に、「もういいか」と問いかけ、父親としての最後の配慮を示してくれました。

私は父に聞かれて余命の話をすることができました。いつ召されるかと毎日が不安だったとき、すべての備えができて最善のときに主は召してくださるのだという確信が与えられました。そして、父は死を前にして平安を与えられました。このように主はあらゆることにご栄光を現わしてくださいました。心から感謝しています。

1950年福岡県北九州市生まれ。武蔵丘高、明治学院大、韓国ソウル神学大学大学院卒業。現在、筑波大学留学生センター、品川国際救援センター日本語非常勤講師。

ベック夫妻結婚50年

50年の主の恵みを感謝して

ゴットホルド・ベック

—2005年8月7日、国際福音センターで—

今年、私と妻のミンヘンは金婚式を迎えました。でも実は、私たちはお互いのことを60年前から知っていました。

ミンヘンと私のおいたちには、いくつかの共通点があります。まず私たちの親は、どちらも主イエス様を信じ、主イエス様を心から愛していました。私たちが生まれる前から、両親は「生まれる子は主にささげる」と、イエス様に約束していました。私の母はサムエルの母ハンナのように祈ったそうです。「このはしために男の子を授けてくださいましたら、その子の一生を主におささげします」。また私たちは第一子ということでも共通しています。ミンヘンは長女で、私は長男です。私の後に3人の兄弟が生まれました。また私たちは子どものころ、ヒットラーに完全に洗脳されていましたから、戦争がみじめな結果になって深く絶望してしまいました。将来は真っ暗闇でした。15歳で希望のない者となり、どのように生きていけばいいか全く分からなくなってしまったのです。

ミンヘンと私は、15歳の時に意識して主イエス様を救い主として受け入れました。それまではずっと聖書を読んだり、祈ったりはしていましたが、「救いの確信」を持つようになってはいませんでした。ミンヘンは私よりも2カ月早く救われました。私より2カ月早く生まれたからではないでしょうか。私たち二人は、救われた後、「ほかの人々にもイエス様を信じてもらいたい」と願うようになりました。「イエス様を伝えるために、私は救われたのだ」と、はっきり確信するようになったのです。私は宣教師になりたいと望んだのですが、戦争から帰った父親は、「まず職業を持たないとダメだ」と言いました。それで私は、1946年から50年までの間、戦争後ドイツで初めて開かれた学校に通うようになりました。しかし、そのためにはミンヘンと離れなければなりません。でも、私たちを導いたルデア姉妹に「何年か離れるのもいいしょう。手紙も書かないで全部を主イエス様に任せなさい」と勧められ、それに



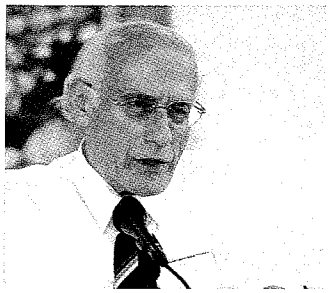
従いました。

ミンヘンは妹のエミリエの勧めでアイドリンゲン姉妹会の聖書学校に行くようになりました。そこでアイドリンゲンの創設者、クリスタ・フォン・フィーバーン姉に、「将来ゴットホルドと結婚して彼の助け手になるのがいい」と勧められたのです。それで私たちは3年後、また文通するようになりました。その手紙は今も大事にとってあります。

1953年、私たちはドイツで婚約しました。けれども、その婚約式は、同時に送別会になってしまいました。私は日本へ行くことになったからです。それについてミンヘンは一言も不平不満をもらしませんでした。「1年後に、また会える」と思ったからでしょう。私もそう思いました。1年後、確かにミンヘンは日本に来ましたけれども、当時の私が入っていた宣教団体のしきたりで、「すぐ結婚することは許されない。着いた日から1年3カ月経ったら結婚式をしていい」、ということになりました。

新婚生活は、茨城県の那珂湊で始まりました。住まいは6畳と3畳の台所もないアパートで、トイレは共同、もちろんお風呂もありません。けれども私たちは主のために来たのですから、何も期待せず、また不自由とも思いませんでした。やがてイエス様は、次々と人々を導いてくださり、130人以上の人々がイエス様に出会って救われました。そのうちの11人は神学校へ行き、今では牧師や牧師夫人として活躍しています。

けれども9年後、私たちは団体から離れるべきだ、と確信するようになりました。日本で伝道するためには、牧師制度、会員制度、10分の1の献金制度などは、人を導くための助けとならず、むしろつまづきになる、と思ったからです。



牧会する人々は、もちろん必要です。イエス様にあって新しいいのちを持つようになった兄弟姉妹が牧会すれば、主は豊かに導いてくださり、祝福してくださいます。また、救われた兄弟姉妹は、決して一人の牧師、一つの団体のものではありません。そのすべてはイエス様のものです。

私たちが団体から離れることは、そこで導かれた愛する兄弟姉妹たちと離れることでもありました。新しい住まいも見つけなければならないし、経済的にどうなるかも全く分かりませんでした。小さい5人の子どもをいかに養っていくか、それすらも全く分かりませんでした。けれど、ミンヘンは、「主にだけ従いましょう。主は必ず責任をとってくださる」と、私と完全に一致して歩んだのです。本当にすばらしい助け手でした。

宇都宮あたりで、いっしょうけんめい住む所を探しましたが、見つかりません。そんなとき、あるアメリカ人の宣教師から電話がありました。「東京の吉祥寺に古い空き家がある。そこならただでいいよ、使ってください」という話でした。ミンヘンはその家を見もせずに、「これこそ主の導きです。行きましょうよ」と言ったのです。引っ越しの費用さえなかったのですが、最後の日曜日に那珂湊の方々が私たちのために献金してくださり、大きなトラックを借りて引っ越すことができました。娘のスーシーは生後6週間でした。そのスーシーがいま41歳ですから、もう41年も経ったのです。

そして現在、キリスト集会では家庭集会を含めて、日本をはじめ世界の140余カ所で福音が伝えられ、主イエス様が紹介されています。200人以上の主にある兄弟たちが聖書のメッセージをとりつぐために走り回り、多くの主にある姉妹たちも主イエス様を紹介する仕事を喜んでし、喜んで犠牲を払うようになっています。全国各地の集会は、それぞれ主のものです。すべての集会がともに主にあって一つとなるべきです。どこかの集会や誰かが中心になったり、支配すべきではありません。各集会は主のものです。人間の支配すべきものではありません。各集会の窓口になっている兄弟たちも、もちろん他の兄弟たちよりも偉いのではない。かえって仕えるべき者であり、最も謙遜な者となるべきです。私は毎日、ミンヘンとそのために祈っています。イエス様だけがご自身の教会をお建てになるようにと。主のみからだである教会は主しか建てられません。

さて、ソロモン王は3000年前に次のように書いています。

良い妻を見つける者はしあわせを見つけ、主からの恵みをいただく。家と財産とは先祖から受け継ぐもの。思慮深い妻は主からのもの。しっかりした妻をだれが見つけることができよう。彼女の値うちは真珠よりもはるかに尊い。彼女は生きながらえている間、夫に良いことをし、悪いことをしない。彼女は羊毛や亜麻を手に入れ、喜んで自分の手でそれ仕上げる。(妻の故に)夫は町囲みのうちで人々によく知られ、土地の長老たちとともに座に着く。彼女は力と気品を身につけ、ほほえみながら後の日を待つ。彼女は口を開いて知恵深く語り、その舌には恵みのおしえがある。その子たちは立ち上がって、彼女を幸いな者と言い、夫も彼女をほめたたえて言う。「しっかりしたことをする女は多いけれど、あなたはそのすべてにまさっている。」と。

(箴言18・22、19・14、31・10、12、13、23、25、26、28、29)

このみことばは、良い妻が得がたいことを示しています。私は、主がミンヘンを生涯の伴侶としてくださったことを、心から感謝しています。そして、きょう、皆さんの前でミンヘンに感謝したいと思うのです。ちょっと恥ずかしいけれど。きょう、初めて、彼女をちょっとほめたい。

私は、主に対して不従順な者でした。**詩篇103篇の2節に、「わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。」**とあります。主の良くしてくださったことを忘れることは感謝しないことであり、罪です。私はもう何十年間、主がくださった結婚、ミンヘンへの感謝をつい忘れがちで、すべてのことを当たり前のように思ってきました。「悪く言わないのは、つまりほめてるんだよ」と自分一人で思っているだけで、感謝を口にせず、いつもミンヘンを悲しませてきました。ミンヘンは聖書に書かれているように、私にとって「真珠よりもはるかに尊い」。ミンヘンは生きながらえている間、私に良いことをし、悪いことをしなかった。一度も。彼女は喜んで自分の手で働く者であり、勤勉そのものです。私はいろいろな人に親しくしてもらっていますが、それもみなミンヘンのおかげです。ミンヘンはほほえみながら後の日を待つ。主を見ているから。彼女は思慮深くみことばを語る。彼女は正直で、透き通っている。娘のハイデもビッキーもスーシーも立ち上がって彼女を幸いな者と言う……。



変な証しになったかもしれませんが、60年間ミンヘンを知り、そして50年間、心を一つにすることができたのは、本当に主の恵みそのものです。金婚式の年にあたり、主がミンヘンを妻としてくださったことを、心から感謝しています。そして愛するミンヘン、50年間、ありがとう!

パパ、ママ、おめでとう!

そして日本のみなさま、シュタインハイムの集会のためにお祈りください。

ハイデローゼ・ガイヤ（ベック夫妻の長女）—2005年8月7日、国際福音センターで—

パパ、ママ、金婚式、おめでとう!両親の50年の結婚生活を通して、娘の私たちは、イエス様からたくさんの恵みと知恵をいただきました。

今ドイツで生活している私は、パパやママだったらこんな時どうするだろうと、両親の顔を思い浮かべながら、主人に仕え、また子どもたちを育ててきました。心の中ではパパやママはいつもいっしょでした。

両親が私たち子どものことを、どれほどイエス様に祈ってくれていたかは、実際に自分が6人の子どもを育ててみて理解できるようになりました。本当に感謝しています。

私たちは両親から聖書を読むことを教えられました。また毎日、両親が祈る姿を見て育ちました。それはよいお手本だったと、思っています。私たちは6人姉妹でしたが、一人は交通事故、一人は病気で天国に召されました。

私がどうしてイエス様と出会ったかを、手短かにお話ししましょう。私はクリスチャンの両親のもとで生まれ育ったので、「神の御子イエス様が全人類の罪を負って十字架にかかり、私たちの罪を赦してくださった」ことを疑ったことはありませんでした。私はイエス様が大好きで、イエス様を愛していたつもりでした。主イエス様に従って生きたいという気持ちは若いころから持っていました。でも、「いい子」になろうと努力しましたが、それは無理なことでした。自分の力でイエス様を喜ばせようとしたり、従おうとしていたからでした。13歳のとき、クリスマスプレゼントを父にねだりました。「日本語の聖書が欲しい」と。でも父は、「あなたはドイツ語の聖書を持っているから、日本語の聖書はいらないでしょう」と言いました。私は怒って寝てしまいました。翌朝起きると、父から「遅れたプレゼント」と言って、欲しかった日本語の聖書を贈られました。聖書を開いてみると、扉のところに次のみことばが記されていました。イザヤ書の43章1節。聖書には、「だが、今、ヤコブよ。」と書かれていますが、その「ヤコブよ」のところが「ハイデよ」となっていたのです。

だが、今、ヤコブ（ハイデ）よ。……あなたを形造った方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。　（イザヤ　43・1、2）

私はこのみことばを読んで、「主イエス様は私のすべてをご存知であり、私のためにすべてを成し遂げてくださるお方だ」と、ただ感謝でいっぱいになりました。そのような深い喜びの体験をしたのは初めてでした。

半年が過ぎたある日、父が言いました。「ハイデ、パパとママはハイデが変ったことに気づいていたよ。次の日曜日は洗礼式があるからどうですか」私は本当にうれしくなりました。このことこそが私の願いだったからです。「両親が気づいてくれたのなら、イエス様との出会いは本物だったのだな」と思えて、本当にうれしくなりました。そして1971年6月に受洗しました。そのとき父が読んでくれたみことばは次のものでした。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

（ガラテヤ　2・20）

それから今日まで、いろいろなことがありました。それらすべての試練や問題を通して、「私がどんなに不忠実な者であっても、主イエス様は忠実なお方であり、私がイエス様に信頼し従っていくなら、イエス様は必ず私を守り導いてくださる」ということを確信できるようになりました。

そして私はイエス様のお導きにより、25年前にドイツで主人のクリストフと結婚することになりました。生まれ育った日本を離れ、私にとって外国であったドイツへ「行った」のです。ドイツでの生活にもだんだん慣れ、私は6人の子どもが与えられました。このように家族7人で里帰りできたことも本当にうれしいです。

私たちの家族はシュタインハイムという町に住んでいますが、日本の集会の方々がよく訪ねてくださいます。それが私たちには大変うれしいのです。そこで日本の方々にお願いがあります。シュタインハイムは田舎の小さな町ですので、集会に集う人数もまだ少ないのです。この町にも救われるべき人たちがもっといるはずです。日本の皆様、どうぞシュタインハイムの小さな群れのためにも、生きて働いておられる主イエス様のご栄光を見させていただけるよう、お祈りください!





私たちは主に祝福されている!

酒井千尋

―2005年8月7日、
国際福音センターで「よろこびのコンサート」でのメッセージから。―

神はキリストにおいて、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。 **(エペソ1・3)**

晴れわたった夏の一日、みんな仲よく福音センターに集って、初めて来られた方々がイエス様のすばらしさを知って、洗礼を受けた方々も多くて、「よろこびのコンサート」もあって……。今日はほんとに、神様の祝福にあふれる一日ですね!
また、ベックさんが52年前に日本に来られて、聖書に基づく真の福音が伝わり、今ではキリスト集会の方々が世界中に四、五千人以上になっている。これこそ、神様の大きな祝福です。
そしてベックさんご夫妻が、金婚式を迎えられたこと。皆でお祝いできること。一時はご病気で皆が心配しましたが、元気に金婚式を迎えられた。これもまた、神様の祝福です。
それで今日は、冒頭の聖句について、ごいっしょに考えてみましょう。

「神はキリストにおいて」

まず、このみことばの始めには、「神はキリストにおいて」とあります。その意味は、「天地を創られたまことの神である主は、そのひとり子イエス・キリストを地上に遣わし、十字架につけ、その血によって私たちの罪を赦し、救い、そのことを通して私たちを祝福してくださった」ということです。これこそ、考えられない恵みです。

「天にあるすべての霊的祝福」その1

次に進みましょう。「天にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました」。その内容は、続く4節の「すなわち……」以下にあります。すばらしい所ですから、ぜひ聖書を開いてお読みください。これを簡単にまとめますと、**4節「私たちをキリストのうちに選び、聖く傷のない者にしようとされ」、5節「神の子にしようとされ」、6節「恵みの栄光がほめたたえられるため」、7節「十字架の血による贖い、罪の赦を受け」、10節「キリストにあって一つに集められ」、11節「御国を受け継ぐ者とされる」**などです。これらは、もっとも重要な「神の祝福」です。
でも、パウロは、もし、時と場所が許せば、さらに多くの「祝福」の山を書き連ねたかったことでしょう。「こんなにいっぱい、祝福されているんだよ!」と。
そうです。救われて信仰を持った私たちは、主の祝福を、あふれるばかり、いただいていて、その幸せを日々、実際に体験しています。それを皆様にお伝えしたい。ですから今日は、「天にあるすべての霊的祝福」について、さらにもう少し考えてみたいのです。

「天にあるすべての霊的祝福」その2

この「天にあるすべての」霊的祝福とは、「天の御国にあふれているすべての」祝福です。
つまり、神に属する、聖い、永遠の、無限の祝福、その「すべて」です。それは、厳然と存在する主の、愛、恵み、あわれみ、いつくしみ、その「すべて」です。
次に、「霊的祝福」ですが、この「霊的」という言葉は、まだイエス様をご存じない方にはなじみのない言葉だと思います。これを説明すると長くなりますから、ここでは、かんたんに「神のみこころから出た祝福」としておきましょう(もちろんこれだけでは不十分です)。「神のみこころから出た祝福」。それはすべて、「霊的祝福」です。「霊的」、つまり「聖霊」、「みたま」については、イエス様ご自身が、次のように語っておられます。

「いのちを与えるのは御霊です。」
(ヨハネ6・63)

「(父なる神が)お遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたし(イエス様)があなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。」
(ヨハネ14・26)

「祝福」とは、神がくださる幸せ

さて、次に、「祝福」という言葉ですが、皆様は「祝福」と聞くとまっ先に何を思い浮かべられるでしょうか。食べ物があること？　寝る家があること？　家族？仕事？　赤ちゃんの誕生？　ほかにも入学、卒業、結婚、出産、また、集会、礼拝、祈り会、家庭集会、よろこびの集い、福音センターなど……。私たちは「祝福」と聞くと、つい、「目に見える」、「神様がくださる幸せ」を思い浮かべがちですよね。でも、実は、「目に見えない」祝福のほうが、はるかに、はるかに、重要です！

もっとも大きいのは、「目に見えない祝福」

そうです。もっとも大きな主の祝福は、「目に見えない祝福」です。主は、目に見えない、私たちの頭では考えられない、多くの多くの祝福を、私たち一人一人に惜しげもなく注いでくださっているのです。

私たちが実感として体験している「祝福」

この「天にある霊的祝福」は、私たちの側から見て、「体験的」に、「実感」として、次のように言うことができます。

＊イエス様の十字架の犠牲により、罪を赦されていること。
＊主によって救われた、という確信をいただいていること。
＊主は今も生きて働いておられること。
＊私たちは主に愛されていること。
＊いつも私たちを愛の目で見つめ、祈りに答え、そばにいてくださること。
＊助け手であり、導き手である聖霊をいただいていること。
＊心の中に、主が、みことばが、住んでいてくださること。
＊苦しみ、悲しみにあっても、いつも平安であること。
＊どんなときにも、希望を持っていられること。
＊イエス様のいのちにあずかり、永遠に主とともに生きる者にしてくださったこと。
＊私たちの国籍は天にあること。
＊天の御国は、この地上よりはるかにすばらしいこと。
＊イエス様とともに永遠にいられるから、死はこわくないこと。
＊いつも祈ることができ、主はそのすべてを聞き、答えてくださること。
＊イエス様のみからだであるキリスト集会に加えられていること。
＊主にある多くの兄弟姉妹たちに恵まれていること。
＊近く必ず、イエス様に会えること。

ほかにも、多くの、多くの「祝福」をいただいています。そして、それらをよく分からせてくださるのが聖書です。聖書にはあらゆる「祝福」が詰まっています。つまり聖書は、主がくださった「祝福の書」なんですね。

また、辛く、悲しい、そのときには決して嬉しくないことも、一生という時を経て見てみれば、それが大きな主の祝福だったことが分かります。イエス様を信じるということは、「人生のすべてを、主からいただく祝福」と受け取れるようになることなんですね。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。
(詩篇103・2)

私たちは「祝福された」存在

さて、始めのエペソ1章3節に戻りましょう。**「神はキリストにおいて、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。」**これはほんとうに、驚くべきことです。「祝福してくださいました。」と過去形になっているのですから、もうすでに祝福されているのです。つまり私たちイエス様に従う者はみな、「祝福された存在」なんです！

そうです。主は、愛するあなたの喜ぶ顔を思い浮かべながら、大きな祝福、小さな祝福を、あなたの人生の最適の場所に、次々と並べていてくださるのです！

しかもこの「天にある霊的祝福」は、無条件に、私たちに提供されているんですね。イエス様を信じれば、この祝福は、すべて、すぐ、いただけます。

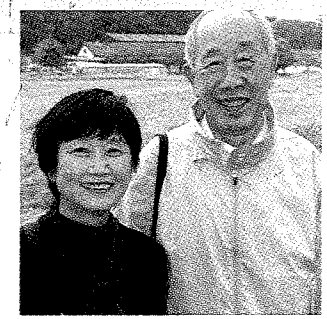
すばらしい「祝福」のおとずれを、逃がさないで！

さて、まだイエス様をご存知ない方にお伝えしたいことがあります。あなたの上には、もう、あたたかい主の愛の目が注がれています(でなければ、今、これを読んでおられるはずがありません)。すばらしい「祝福」のおとずれは、すでに始まっているのです。

どうか、イエス様を信じて、「天にあるすべての霊的祝福」を、あふれるばかり、受け取ってください。そうすれば、あなたの人生は、大きな幸せの中に、喜びの中に、つまり「天にあるすべての霊的祝福」の中に移されます。人生は、大きく変わります。

イエス様は、今、この瞬間にも、「天にあるすべての霊的祝福」を用意して、かわいいあなたがイエス様のもとに来ることを、ほほ笑みながら待っておられます。

酒井千尋
1933神戸生まれ。芸大中退、早大卒。
コピー、シナリオライター。エディター。
キリスト集会出版物編集。





［モーセの十戒］

10 神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック

1それから神はこれらのことばを、ことごとく告げて仰せられた。
2「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、
あなたの神、主である。
3あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。
4あなたは、自分のために偶像を造ってはならない。
上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。
5それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。
あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、
6わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、
恵みを千代にまで施すからである。
7あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。
主は、御名をみだりに唱える者を、罰せずにはおかない。
8安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。
9六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならない。
10しかし七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはどんな仕事もしてはならない。—あなたも、あなたの息子、娘、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、また、あなたの町囲みの中にいる在留異国人も。—
11それは主が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にいるすべてのものを造り、七日目に休まれたからである。それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された。
12あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が与えようとしておられる地で、あなたの齢が長くなるためである。
13殺してはならない。
14姦淫してはならない。
15盗んではならない。
16あなたの隣人に対し偽りの証言をしてはならない。
17あなたの隣人の家を欲しがってはならない。すなわち隣人の妻、あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない。

（出エジプト 20・1〜17）

今回は、第八の戒め「盗んではならない。」について、ごいっしょに考えてみましょう。

盗んではならない。(出エジプト20・15)

私たちは、この地上にある「すべてのものは、主のものである」ということをしっかりと心に刻みこむべきです。

初めに、神が天と地を創造した。
(創世記1・1)

聖書は、このみことばから始まります。これこそが、私たちの全存在の基盤です。

地とそれに満ちているもの、世界とその中に住むものは主のものである。
(詩篇24・1)

これらのみことばの中に、天地の創造者である主のみこころが明らかにされています。主だけが、天地のただひとりの所有者です。主はこの地上のすべてのものと、すべての自然の力を支配しておられます。

人間は、それら地上のものを、主の御手からいただくのです。主なる神は、**「世界とそれに満ちるものはわたしのものだから。(詩篇50・12)」**と言われます。しかし人間は、この地上にあるものを自分の所有物であるとみなし、神を無視してすべてを自分の思い通りにしたいと思っています。

モーセの十戒の前書きにある**「わたしは、・・・あなたの神、主である。(出エジプト20・2)」**というみことばと、第八の戒め「盗んではならない。」とは、密接な関係があります。まず、「私たちが持っているものは、すべて主のものだ」ということを、はっきり認識しておくことが大切です。主なる神との関係が正しければ、私たちとこの世のすべてのものとの関係も、正しいものとなります。この地球の造り主としての主なる神を清い畏れをもって認識した者は、神の偉大さと権威の前におののかざるをえません。私たちはどれだけ多くのものを主に依存していることでしょうか。

また、個人だけでなく、国々もまた、主なる神の支配下に置かれています。

神は、ひとりの人からすべての国の人々を造り出して、地の全面に住まわせ、それぞれに決められた時代と、その住まいの境界とをお定めになりました。
(使徒17・26)

神は季節と時を変え、王を廃し、王を立て、知者には知恵を、理性のある者には知識を授けられる。(ダニエル2・21)

現代の混乱を見てください。人間は、神を離れて何をやってもいいという、思い上がった幻想を一刻も早く捨て去るべきです。

いと高き方が人間の国を支配し、これをみこころにかなう者に与え、また人間の中の最もへりくだった者をその上に立てる・・・。
(ダニエル4・17)

人間は、創造主である神に栄光を帰すことのなんと少なく、また神が私たちにくださる賜物に対して感謝することのなんと少ないことでしょうか。

いったいだれが、あなたをすぐれた者と認めるのですか。あなたには、何か、もらったものでないものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。
(1コリント4・7)

私たちは何一つこの世に持って来なかったし、また何一つ持って出ることもできません。
(1テモテ6・7)

このことを知るなら、私たちは主なる神に栄光を帰し、私たち自身は所有者ではなく、また与える者でもないことをよくわきまえるのは当然のことです。私たちには、何一つ、「これは私たちのものだ」と言う権利はありません。私たちはそれらのものを主なる神から任され、短い期間、管理しているに過ぎません。私たちは単に主のしもべであって、自分勝手にできるものなど何一つないのです。

主こそ、主が望むものを望むときにお与えになり、また取る権威を持っておられます。

私たちができることはただひとつです。「主が私たちにくださるすべてのことに対して、主に感謝すること」です。というのは、すべては私たちの手柄ではなく、神の恵みだからです。たとえ主が私たちから何かを取り去られることがあっても、主を賛美しましょう。

私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で私はかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。
(ヨブ記1・21)

「神から誉れを奪い取る」ことは、この世に存在するもっともひどい窃盗行為です。ただ任されて管理しているに過ぎない者が、所有者としてふるまうとすれば、それは詐

欺以外の何ものでもありません。

「盗んではならない。」という戒めは、まず第一に、主なる神への私たちの行為に対して適用される戒めだということを、真剣に受け止めましょう。

主なる神がお造りになったものはすべて良く、価値があり、人間を喜ばせ、そして神ご自身の栄光を現わします。

神が造られた物はみな良い物で、感謝して受けるとき、捨てるべき物は何一つありません。　（1テモテ4・4）

銀はわたしのもの。金もわたしのもの。―万軍の主の御告げ。―（ハガイ2・8）

人間の罪深い手が神の所有物をわがものとし、それを自分勝手な目的に役立てようとすると、神が「人間の手段」になってしまいます。これこそがもっとも罪の大きい「盗み」です。しかし、現実には、神の賜物をみだりに使うことがなんと多いことでしょうか。権力欲を満たすために、隣人を殺すために、自分勝手なわがままを通すために、また罪深い目的を達するために、神の所有物がどれだけ不当に使われていることでしょうか。

「神の賜物の濫用」は、神の所有物を犯すことであり、したがって「盗んではならない。」という第八の戒めに対する罪です。人間は、この地上のものを神の御手から感謝して受け取る者、そして神から管理を頼まれているにすぎない者であるということを知っている人は、神のみこころに逆らってまで神の所有物を使うことができません。

主なる神は、主が個人にお与えになったものを守ってくださいます。「盗んではならない。」という戒めは主のくださる防壁であり、神の聖なる「垣根」です。

したがって、あらゆる盗みは、人間に対する不正であるだけでなく、「神に対する不正」です。人間が持っているものはすべて主のものですから、それを盗むことは神に対する「盗み」です。

「盗んではならない。」と主なる神の命令があるから、つまり主が所有物を守ってくださるから、私たちは、主が「私たちひとりひとりの私有を望んでおられる」ということがわかります。

「六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならない。」（出エジプト20・9）と言われた主は、ここでは「盗んではならない。」と命令しておられます。労働は所有物を獲得するために神の与えられた道です。聖書は神の聖なるみこころにかなった人間の日常生活を整えてくださいます。また聖書は神に喜ばれる社会生活のための基礎です。

旧約聖書と新約聖書の中で労働と賃金に関して私たちに与えられている基本的な考え方を、尊重し、応用するなら、多くの社会問題は解決し、盗みの誘惑もなくなることでしょう。

それについての主イエス様のみことばは、なんと単純で基本的でしょうか。

働く者が報酬を受けるのは、当然だからです。　（ルカ10・7）

パウロは次のように言っています。

私たちは、あなたがたのところにいたときにも、働きたくない者は食べるなと命じました。　（2テサロニケ3・10）

労働に対して正当な賃金を支払わない者は、そこで働く人々の不満や憤激を呼び起こし、盗みの誘惑をはびこらせます。

ヤコブは、信者でありながら労働を搾取した者について、厳しい警告を発しています。

聞きなさい。金持ちたち。あなたがたの上に迫って来る悲惨を思って泣き叫びなさい。あなたがたの富は腐っており、あなたがたの着物は虫に食われており、あなたがたの金銀にはさびが来て、そのさびが、あなたがたを責める証言となり、あなたがたの肉を火のように食い尽くします。あなたがたは、終わりの日に財宝をたくわえました。見なさい。あなたがたの畑の刈り入れをした労働者への未払い賃金が、叫び声をあげています。そして、取り入れをした人たちの叫び声は、万軍の主の耳に届いています。（ヤコブ5・1～4）

人間が作った法律の目からのがれられても、主なる神の目からみれば正しくない所有物がたくさんあります。法律にはかからないとしても、神の前では許されないような金儲けの抜け道はたくさんあります。

私たちが手にする労働の報酬、贈り物、遺産などは、主の御手から受け取るものであり、正当な所有物です。しかし、盗んだものや不正に獲得した利益は、神の前に認められず、不正な財産と見なされます。

また今日、なんと多くの人が、競馬、競輪、くじ、投機などによって不当にお金を儲けようとしていることでしょう。一人の人が賞

金を獲得するためには、どれだけ多くの人がお金を失わなければならないことでしょう。賞金を獲得したら、それは同胞のお金を取る、ということになります。これが主なる神の前に正当化されることではありません。賭けによって得たお金は、悪魔からの贈り物です。主はそのようなお金に祝福を与えることがおできになりません。

私たちはその実例を、聖書の中に見ることができます。アブラハムは、ソドムの王から何一つ受け取ろうとはしませんでした。彼はそれが正当な方法によるものではないことをよく知っていました。

アブラムはソドムの王に言った。「私は天と地を造られた方、いと高き神、主に誓う。糸一本でも、くつひも一本でも、あなたの所有物から私は何一つ取らない。それは、あなたが、『アブラムを富ませたのは私だ。』と言わないためだ。」

(創世記14・22、23)

私たちの集会がお金を必要とする場合、未信者からは絶対に頂かないという態度を守れば、主は豊かな祝福を与えてくださるでしょう。

主イエス様は、悪魔の誘惑にあわれたとき、正当な方法によらずに食料をもらうことは、どんなに飢えていたとしても正しくない、として悪魔の誘惑を退けられました。主イエス様はただ父なる神の御手からの恵みのみで生きることを望まれ、すべてにおいて父なる神が配慮していてくださるということを、よく知っておられたのです。

また、自分は「泥棒ではない」と思っている人でも、不注意によって第八の戒めに反する場合があります。たとえば、借りた本を返すのを忘れた場合、それは一種の盗みになってしまいます。

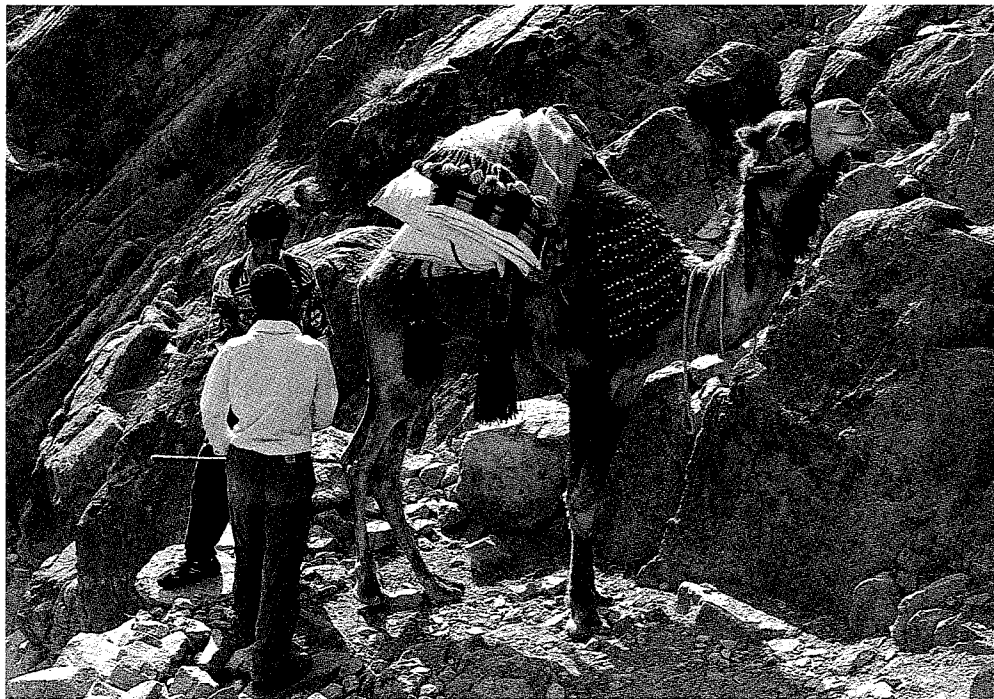
「盗んではならない。」という第八の戒めはまた、個人の所有物だけではなく、会社や学校、集会などの所有物についてもあてはまります。

通常、人々は、他人の家に入ったり盗んだりはしません。しかしそのような人々も、公のものを私物化することに平気だったりします。会社の従業員は、軽い気持ちで雇い主の所有物を失敬しないでしょうか。勤務時間中に自分の用事をしたり、そのために会社のものを使ったりしないでしょうか。神の目から見ると、これらは決して正しいことではありません。

また、世の中には、どれほど多くのうそ、偽り、盗みが、私たちの生活の中に根づいていることでしょうか。どれだけのビジネスが、うそとまことを区別し、また神のみこころと自分の思いとを区別して行なわれているでしょうか。経済生活における危険や誘惑は非常に大きく、神の力なしには罪を犯さないでやっていくことは不可能です。

「盗んではならない。」という第八の戒めを犯すことの根は、結局、聖書が「金銭を愛すること」と呼んでいるものに他なりません。

金持ちになりたがる人たちは、誘惑とわなと、また人を滅びと破滅に投げ入れる、愚かで、有害な多くの欲とに陥ります。金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは、金を追い求めたために、信仰から迷い出て、非



常な苦痛をもって自分を刺し通しました。
（1テモテ6・9、10）

金銭に対する執着心は、なんと深く人間の本性に根を下ろしていることでしょう。多くの人々は、自分はそんなことはない、と思い込んでいます。はたしてそうでしょうか。

欲張り、けちもまた、人の心に深く巣くっている罪です。紙一枚、本一冊、家具一つ手放せない人がいます。またある人は、自分の利益をなりふりかまわず追求します。

こうした性質は、金銭を愛することから来ます。金銭欲は、心の中だけでなく、貧しい人々の心の中にもあります。この世のものは、蓄えられるためにではなく、用いられるために主からゆだねられています。

盗みをしている者は、もう盗んではいけません。かえって、困っている人に施しをするため、自分の手をもって正しい仕事をし、ほねおって働きなさい。
（エペソ4・28）

主イエス様に従う者が、覚えなければならないことは、「自分たちが持っているものは、自分たちのものではなく、神から預けられ、ゆだねられたものである」ということです。なぜ、主は私たちにゆだねられたのでしょうか。それは福音を宣べ伝えるため、悩んでいる人々が、主のみもとに来るために用いられるべきものだからです。

旧約聖書の時代には、収入の十分の一が主に捧げられました。そしてイスラエルの民がこのことを実行したとき、主は豊かに祝福してくださったのです。

「十分の一をことごとく、宝物倉に携えて来て、わたしの家の食物とせよ。こうしてわたしをためしてみよ。――万軍の主は仰せられる。――わたしがあなたがたのために、天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうかをためしてみよ。」（マラキ3・10）

これはすばらしい神の約束です。私たちはみことばに従って、喜んで収入の十分の一を主に捧げますが、それは、決して律法に強制されてではなく、主に対する愛と従順の表われです。もちろん、すべては主のものですから、私たちが持っているものすべては、いつでも主に捧げる心構えが必要です。

もちろん新約聖書は、収入の十分の一だけではなく、持っている物すべてを主に捧げなさい、なぜならばすべては主の物だからです。とあります。

主に喜んでいただきたいと思う者は、すべてを主に捧げるべきです。「主よ。私は何をしたらよいのでしょうか」というパウロの祈りは、私たちが持っているものに対しても同じ態度を取るべきことを教えてくれます。

ユダ部族の人たちが、バビロン捕囚から帰還したとき、主は次のように嘆かれました。

「万軍の主はこう仰せられる。この民は、主の宮を建てる時はまだ来ない、と言っている。」ついで預言者ハガイを通して、次のような主のことばがあった。「この宮が廃墟となっているのに、あなたがただけが板張りの家に住むべき時であろうか。」（ハガイ1・2～4）

当時の信者たちは、主のことよりも自分を大事にしたために、次のような結果になってしまいました。

あなたがたは、多くの種を蒔いたが少ししか取り入れず、食べたが飽き足らず、飲んだが酔えず、着物を着たが暖まらない。かせぐ者がかせいでも、穴のあいた袋に入れるだけだ。（ハガイ1・6）

主のものを主から奪うことも、「盗んではならない。」という第八の戒めに反する罪です。主イエス様は山上の垂訓で、ご自分に属する者が、地上のものに対してどのような態度を取るべきかを明らかにしておられます。

「自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗みます。自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。」（マタイ6・19～21）

「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」
（マタイ6・33）



中高生キャンプの参加者たち（国際福音センター）



日曜学校キャンプで行われた▶
スイカ割り
（長野県 市民の森 体育館）

よろこびの集い2005

キリスト集会は各地での日曜礼拝・福音集会のほか、家庭集会、祈り会、ケーキの会、よろこびの集いなどを、随時あるいは定期的にもっています。

このうちよろこびの集いは、公共の宿泊研修施設、ホテル、キリスト集会の施設（国際福音センター）などを会場にして、寝食を共にしながら、礼拝や福音集会、さらには自由な語り合いの時をもつものです。まだイエス様を信じていない人も含めて、だれでも自由に参加できますので、多くの人と知り合う機会が与えられます。よろこびの集いを通して、初めて聖書の福音に触れ、その結果、信仰に導かれた方も少なくありません。開催場所は北海道から沖縄までの国内十数カ所、海外数カ所に及びますが、参加者数、期間、開催回数などが特に多いのは、国内では国際福音センター（長野県御代田町）、海外ではドイツで開かれる集いです。

国際福音センターのよろこびの集いは年に10回余り開かれ、結婚式、故人の納骨式と記念会、赤ちゃんの祝福式、コンサートなども併せて行なわれます。

夏のよろこびの集いでは、小学生と保護者が参加する日曜学校キャンプと、中高生を中心にしたキャンプも同時に開催されます。今年は7月29−31日と8月19−21日に行なわれ、センターの西約20キロの「上田市民の森」へ遠足して、サッカー遊び、スイカ割り、野外料理などを楽しみました。ほかに、福音センターの大掃除を行うワークキャンプが毎年（今年は5月28日と11月12日）行なわれています。

ドイツよろこびの集いは、初夏と秋に2回ずつ、計4回行なわれます。出国から帰国まで8日間という、ゆったりしたスケジュールの中で、たくさんの聖書のメッセージと信仰の証しが語られ、親密な交流や、観光、ショッピングなども楽しめます。今年の夏はAグループ（5月25−6月1日）とBグループ（6月3−10日）に、それぞれ約130人が参加。南ドイツ・ミヘルスベルグの施設に宿泊して、礼拝や福音集会のほかに、中世の城壁都市ローテンブルク、360度の大パノラマを展望できる高地ツークシュピッツェ、スイス国境に位置するボーデン湖などの観光を楽しみました。秋はスイス国境に近いフィリンゲンの施設にCグループ（10月11−18日）とDグループ（同19−26日）が集い、初めて参加した方々17人がベックさんからイエス様の話を聞いて共に祈ることができたそうです。



▲中高生キャンプにて（国際福音センター）



▲日曜学校キャンプで
ジャンケン遊びをする子供たち
（長野県 市民の森）



▲
お疲れさま！
5月28日のワークキャンプで汗を流した方々。
（国際福音センター）

洗礼式の後、受洗者（後列右から4人目）
を囲んで喜びを分かち合う若者たち
▼（国際福音センター）





御代田よろこびの集いの日曜礼拝▶
心を一つにして主への賛美を歌っているところ
（国際福音センター）

ドイツよろこびの集い

初夏―ミヘルスベルグ


ミヘルスベルグの集会場


ツークシュピッツェからの眺め


アイドリンゲンでの集い







賛美の歌を高らかに（フィリンゲン集会所で）









2005年秋ドイツよろこびの集いの会場となった
フィリンゲンの宿泊施設

フィリンゲン集会所の
中庭テラスに勢ぞろい
した参加者たち

福音集会での賛美
（フィリンゲン集会所で）
ドイツよろこびの集い
秋―フィリンゲン























2006年（上半期）よろこびの集いスケジュール

1月 12/31（金）～1/2（月）
御代田

14（土）～15（日）
熊本

28（土）～29（日）
沖縄

2月 04（土）～05（日）
福岡

10（金）～14（火）
バンコク

17（金）～21（火）
オクラホマ（ミニキャンプ）

25（土）～26（日）
仙台

3月 04（土）～05（日）
名古屋

11（土）～12（日）
大洗

17（金）～19（日）
御代田

23（木）～28（火）
バンクーバー

4月 01（土）～02（日）
大阪、神戸

14（金）～16（日）
御代田

22（土）～23（日）
松山

5月 03（水）～05（金）
御代田

13（土）～14（日）
北陸

20（土）～21（日）
札幌

6月 02（金）～04（日）
御代田

14（水）～20（火）
ミヘルスベルク A

23（金）～29（木）
ミヘルスベルク B



こちら春日部集会で～す from KASUKABE

春日部集会が始まって15年が経ちます。何人かのご婦人たちが、それまでの教会生活の中で霊的に破産した苦しみをもって、救いを求め、ベックさんと関東地方の近隣の集会でお話することを願ったのが始まりでした。当時、教会では毎週水曜日に定期的に家庭集会を持っていました。信者同士が自発的に聖書を読み、語り合いの時を持つその場は、教会の中では唯一のオアシスでした。けれども当時教会は、講壇で語られるみことばが香りを放たなくなり、多くの人たちはこれでいいのかと思いながらも、神様の建てられた地方教会を支え、福音宣教の場として用いられるべく必死でがんばるしかない、と思っていました。

そのような状況下で、その春日部の家庭集会にベックさんが来てくださることになりました。半信半疑で、何を用意してよいか、どんな方が集まられるか、わからないまま、1990年5月23日の家庭集会が始まりました。ベックさんが語られた聖書のみことばは次のものでした。

主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなしい。(詩篇　127・1)

会場となった2軒続きの家に100人以上の人が集まりました。その日参加した男性で、現在の春日部集会に集っている人は皆無です。

吉祥寺集会からは、これ以降毎週水曜日に、ベックさん、蘇畑さんら多くの方々が来られて聖書のメッセージを語ってくださいました。霊の飢え渇きは満たされ、次々と人々が救われ、教会に出席していた男性たちも徐々に集会へと導かれるようになりました。ただこの時、日曜日の礼拝は、吉祥寺へ出かけて行っていました。出かけることは苦にならず喜びでしたが、全員が集うことは不可能でした。

その後、「地元で礼拝を!」という強い願いが祈りとなってささげられ、現在の「ひかり幼稚園」がご好意で借りられて、9月からは礼拝も持てるようになりました。私たちはその1ヶ月前、長野県御代田町の国際福音センター・ゲストハウスで市川集会と合同でミニキャンプを行い、霊の一致をもってささげる礼拝のすばらしさを体験していましたが、ひかり幼稚園でささげる礼拝は、たどたどしいながらもイエス様に満たされたものでした。それ以降、120脚の椅子を購入した礼拝場は、多くの方々を次から次へと集会の礼拝者として導いてくださいました。

15年の歩みは遅々としたものでしたが、集会の成長を促すかのように、様々な問題も起こされてきました。問題が起こされるたびに、男性(金曜夜)、女性(金曜昼)それぞれの祈り会で祈りがささげられています。もちろん、まだ救われていない家族・親族・友人のためにも日夜、祈っています。

2年ほど前からは、若者たちの「ギデオンの祈り会」(木曜夜)が盛んになり、集会全体の喜びとなっています。福音集会後の交わりにも、より多くの方々が参加され、今まで以上に互いに愛し合い、霊の一致をいただくことを願っています。

そして毎日、心を一つにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、神を賛美し、すべての民に好意を持たれた。主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。(使徒　2・46、47)

このような集会に、先ごろ大きな問題が起こされました。集会場が園側の都合で2007年4月から使えなくなることです。今、春日部集会ではそのために祈っています。主イエス様は発足以来、不可能と思える事柄にも一つ一つ私たちの祈りに答えてくださいました。

わたしが、あなたの神、主である。わたしはあなたをエジプトの地から連れ上った。あなたの口を大きくあけよ。わたしが、それを満たそう。(詩篇　81・10)

今後も満たしてくださる主に信頼しつつ歩みたいと思っています。春日部集会の霊的成長のためにお祈りください。

(吉田浩)

Information Box [インフォメーション・ボックス]

ドイツからの手紙

キリスト者としての心情をつづった手紙を紹介しましょう。
6月のドイツよろこびの集いで親交を深めた女性から、
久保和子さん（吉祥寺集会）ら数人の参加者にそれぞれ送られてきた同じ文章の手紙で、
私的な書簡というよりは、キリスト集会の皆さんに語りかけているような内容です。

私たちはミヘルスベルク（よろこびの集いの場所）で祝福された時を共に過ごしましたね。私は日本の方々のうれしそうな輝いたお顔を決して忘れません。地球の半分の距離を隔てた私たちが、イエス・キリストの聖い血のゆえに兄弟姉妹である、ということは、私たちが人生で経験する最も驚くべき奇蹟の一つです。

今日、あなたは個人的に主を体験しましたか？これは私が最も大切にしている質問です。もし、私たちの主が生きておられ、祝福してくださる神様であるならば、そのことに気づく必要があります。主はいろいろな方法で、主の愛、導き、守り、ご臨在を示されます。そして、主のくださるすべてのものを享受した時、私たちの心は感謝でいっぱいになり、礼拝せずにいられません。このようにして、主としっかり結びつくことができるのだと思います。

よろこびの集いの後、ベックさんのご家族が私たちのメットマン集会に来てくださり、主が日本でなされた偉大なお働きについて報告されました。そのお話から私は、大切なことを学びました。福音を、まず自分の家族と分かち合う、



後列右から3番目が
ローザ・グラスホフさん

その次に友人たち、近所の人たち、学校や職場の同僚たちと分かち合う、それから、できれば、街で出会う人々、あるいは旅行中やその他の機会に出会う見知らぬ人々と福音を分かち合うのがいい、ということです。その方が、伝道集会にお誘いするより、もっと有効です。

個人的に知っている人なら、イエス様のお話をするのは易しいでしょう。でも、そのためには信じていることを実践する必要があります。自分の生活自体が、イエス様はすべての点で人生の導き手であられることを証しするものでなければならないと思います。

私たちの主イエス様のすべての祝福があなたにありますように。
そして、次のみことばをお送りします。

恐れないで、ただ信じていなさい。（マルコ　5・36）

ローザ・グラスホフ（メットマン集会）

本誌は次の11号で、次のようなタイトル（仮題）の特集記事の掲載を予定しています。

「みことばは生きて働く」—100人の証し—

この特集は、多くの方々に、心にひびいた一つのみことばと、その体験を書いていただき、みことばが実際に生きて働くこと、大きな力を持っていることを示そうというものです。
悩み苦しんでいたときに一つのみことば出会って、大きな慰めをいただいた人もいるでしょう。絶望の人生が希望の人生に変わったという人もいるかもしれません。あるいは、自分が赦されていることを確信した、自分の高ぶりに気づかされて小さくならざるをえなかったなど、体験はさまざまでしょう。それらを紹介することによって、一般の方々が一人でも多く「聖書を読んでみたい」気持ちになることを願っています。
同じような特集記事は、すでに本誌の4号に「みことばのクリスマスプレゼント」というタイトルで載せています。このときは30人近い人に匿名で寄稿していただきました。今回はもっと数を増やして100人以上の「証し」を実名で掲載したいと考えています。

みことば特集の原稿を募集します！

つきましては、全国の方々に寄稿をお願いする次第です。
原稿の書き方は本誌4号の特集記事を見ていただければお分かりになると思いますが、以下の要領で執筆、送稿をお願いします。

◆原稿の書き方：初めにみことばを、一段あけてその下に「証し」、最後に氏名と集会名をお書きください。

◆原稿の長さ：みことば、氏名なども含めて最大限500字、できれば400字以内におさめてください（多くの方の原稿を載せたいためです）。

◆締め切り：2006年2月末。

◆送稿方法：メールまたは郵送。

◆メールアドレス：yoichi-s@kzh.biglobe.ne.jp

◆郵送先：〒181-0005
東京都三鷹市中原3－1－55
清水洋一

問い合わせの必要が生じるかもしれませんので、原稿に連絡先（電話番号、メールアドレスなど）を添えてください。



5/1　菊池 昌也・園子



7/30
小川 一之・菜穂子



8/20
大前 一成・真弓



9/3
川田 典明・絵美

結婚式と葬儀のご報告







私たちはみなが眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。
終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。
ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、
私たちは変えられるのです。（Ⅰコリント 15･51、52）





葬儀
Funeral





2005年
5/06　本井 弘巳
5/10　内山 カツエ
5/11　布村 由美子
5/17　飯島 文雄
5/20　宮子 久枝
5/24　三浦 ツエ
5/31　春木 國枝

9/17 宇野 健太郎・さおり



9/19
笠井 洋一朗・麗



9/23　渡井 隆・薫



愛は結びの帯として
完全なものです。（コロサイ3･14）

Wedding
結婚式

6/09　村田 勝年
6/21　奈良 昭平
6/23　森 新一
6/30　中野 節生
7/15　寶田 晴夫
7/18　白井 利八
7/19　飯塚 洋子
7/25　米山 惠子
8/03　平井 幸一
8/04　湯澤 鋭二
8/22　菊池 素子









10/04　岡 ルリ
10/05　大出 峻郎
10/25　南 千富美
10/28　岩本 政和
10/29　遠藤 あさ











◀第1回公演　府中の森芸術劇場

▼第11回公演　昭和女子大学人見記念講堂



Messiah
G.F. Händel

演奏を重ねて10年
2005年秋「メサイア」全曲コンサート

イエス様を賛美するヘンデル作曲「メサイア」は、オラトリオの最高傑作と言われる大曲です。キリスト集会有志の混声合唱団・管弦楽団は、1996年以来、その全曲演奏を行なってきましたが、2005年11月6日のコンサートで10年目を迎え、公演回数は11を数えました。
この日、会場の昭和女子大学人見記念講堂は全国から詰めかけた1857人でほぼ満席。心を一つにした喜びいっぱいの歌声がホールに響き渡りました。
終演後、準備期間を含めて11年余にわたり合唱・合奏を指導してきた中西規夫、和世子夫妻に、出演者と裏方スタッフの有志から感謝の花束が贈られました。
10年の演奏の歩みは下記のとおり。メサイアの全曲演奏は2006年も10月28日、人見記念講堂で行なわれます。

第１回	1996年12月	8日	府中の森芸術劇場（東京・府中市）
第２回	1997年	9月15日	神戸ポートピアホール
第３回	1998年12月	5日	横浜みなとみらいホール
第４回	1999年11月28日		東京芸術劇場（東京・池袋）
第５回	2000年	9月17日	大宮ソニックシティーホール（埼玉県）
第６回	2001年	7月22日	福岡西市民ホール（福岡市）
第７回	2001年	9月 1日	東京芸術劇場
第８回	2002年10月13日		オーチャード・ホール（東京・渋谷）
第９回	2003年11月	3日	府中の森芸術劇場
第10回	2004年12月25日		すみだトリフォニーホール（東京・錦糸町）
第11回	2005年11月	6日	昭和女子大学人見記念講堂（東京・世田谷）



Kokosnußkuchen
ココナッツ ケーキ

ビッキーのケーキづくり

今回はココナッツを使ったケーキを作ってみましょう。
ココナッツ（＝椰子の実）は常夏の島を連想させますが、
ドイツではクリスマスシーズンのお菓子作りによく使われています。
ココナッツ入りのクッキーはよくありますが、ケーキは
なじみがないかもしれませんね。しっとりとやわらかい生地に
サクサクとココナッツの歯ごたえが楽しく、
やさしい味のホッとするお菓子です。



材料

直径20cm程度の丸型 1個分
または、15.5cm×7cmのパウンド型 2個分

《すべて常温にしておく》

- 卵　3個
- 砂糖　150g
- バター（有塩で良い）150g
- 牛乳　150cc
- 塩　少々
- ココナッツダイス　100g
  ココナッツロングを刻んで使用してもよい
- 小麦粉　250g
- ベーキングパウダー 小さじ2

道具

型：ここでは20cmの丸型を使用
その他：泡立て器　ボール2つ　へら



15.5cm×7cmのパウンド型で焼いたところ

作り方

《下準備》

a. 小麦粉とベーキングパウダーをあわせてふるっておく

b. 卵は卵黄と卵白に分けておく

《メレンゲを作る》



1. 卵白を泡立て器で泡立てる
半分くらい泡立ったら砂糖大さじ2を少しずつ加えながら泡立てる

ポイント　角が立つまで泡立てる

《生地を作る》



2. 常温でやわらかくなったバターを泡立て器でクリーム状に練る



3. 残りの砂糖を少しずつ加えて混ぜる

ポイント　この段階でふっくら白っぽくなるまで丁寧に混ぜる



4. 卵黄を1個ずつ加えて混ぜる

5. 塩をひとつまみ加える



6. 牛乳を3回くらいに分けて入れ、混ぜる

ポイント　卵黄と牛乳が入り生地がなめらかな状態になる



7. ココナッツを2回くらいに分けて入れ、混ぜる



8. ふるっておいた小麦粉とベーキングパウダーを数回に分けて入れ混ぜる

ポイント　ココナッツと粉が入り生地が少し重い状態になる



9. メレンゲを3回くらいに分けて入れ、へらでさっくりと混ぜる

ポイント　1回目はメレンゲを生地によくなじませるように混ぜる
2回目以降はメレンゲをつぶさないように混ぜる

《型に生地を入れて焼く》
オーブンを180℃にあたためる



10. 型にバターなどを塗り生地を流し入れる



11. 180℃のオーブンで60分くらい焼く

ポイント　オーブンや型によって焼く時間が異なるので竹串をさして確認
竹串に生地が付いてこなければ焼き上がり



12. 焼き上がったら型から出して冷ます

Kokosnußkuchen

ココナッツ ケーキ



このココナッツケーキのレシピは、甘さ控えめなので、パウダーシュガーをかけてもよく合います。
また、ココナッツはチョコレートとの相性もよく、溶かしたチョコレートを塗った上にココナッツをあしらえば、はなやかな装いになります。



ココナッツのココ(coco)は、ポルトガル語で「猿」を意味します。ココナッツの種子の殻には3つの孔があり、その部分が猿の顔に似ているためだといわれています。熱帯の地域では、捨てる部分がないほどに有用で生活に欠かせないココナッツ。訓練された猿が椰子の木に登ってココナッツを採る光景も見られます。



写真は、ココナッツで作った猿の形の器。